

分類語彙表および 古典対照語彙表、 それぞれの成立と特徴

石井 久雄

日本語立命研究会 2021年8月5日

『分類語彙表』

国立国語研究所資料集 6, 1964年
主担当・林大

『分類語彙表 増補改訂版』

国立国語研究所資料集 14, 2004年
担当・林大・中野洋・宮島達夫・
山崎誠ほか多数

以下、分類語彙表と言うことがある。

林 大 はやしおおき

1913年～2004年

中野 洋 なかの ひろし

1944年～1999年

『古典対照語い表』

宮島達夫編

笠間索引叢刊 4, 1971年

『日本古典対照分類語彙表』

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・

安部清哉編

笠間書院, 2014年

古典対照語彙表と言うことがある。

宮島 達夫 みやじま たつお 1931年～2015年

分類語彙表は、国語研究所で、もともと、語彙調査の結果を示す語彙表として、五十音順のもの・使用率順のものと並んでいた。しかし、同義語類義語集として有用であると迎えられて初版からすでに脱皮を始め、増補改訂版で広範な同義語類義語集となつた。

古典対照語彙表は、宮島さんが、もともと、古典諸作品の類似を用語の観点から計算するために作成した。しかし、古典諸作品における用語の有無を簡便に知る用具として迎えられ、新版では、語彙の計量的諸相の研究のために電子媒体が用意された。

とともに、
作成の最初の動機を離れたところで、
世上、活用されている。

山崎 誠

『分類語彙表』の特徴と問題点

語彙資源活用シンポジウムでの発表

2017年3月6日，国立国語研究所

石井 久雄

古典語彙の出現頻度の分布

—『日本古典対照分類語彙表』を
利用して
語彙研究会定例研究会第100回での
発表

2014年5月24日，愛知学院大学

ここでは

分類語彙表・古典対照語彙表の前書きなどを
実際に読む

5 意味論上の試み

5.1 分類語彙表

5.1.1 まえがき

次に掲げる語彙表はこの婦人雑誌の語彙調査で使用度数が5およびそれ以上に上った語^{注1)}（固有名詞および数詞を除く、四千三百語足らず）について、語の意味から分類して排列したものである。

ここでいう「意味」は、実際の誌面から読みとられる、前後の関係をふくんだ具体的なその場の「意味」ではなく、語が本来示していると考えられる、辞書に解説されるような「意味」である。ただ、われわれが一つの語と認めて勘定したものの中には、区別してよい幾つかの「意味」にあたるものがあるが、そのくわしい分析を現在までに完了していないので(cf. §5.2)，ここでは、そのうち比較的多用いられていると認められる「意味」について考えることとした。すなわち理想的には同じ見出しが数箇所に現われてよいはずであるが、ここでは一箇所にしか現われないことになる。

一つの語の「意味」といっても、中心的な基盤的なものと、附加的な従属的補助的なものとが区別されることがある。たとえば、概念の複合として見られる語にあっては、一方が他方の限定をなすものが多く、その限定を従属的なものと見ることが出来る。また、語感（その語が用いられる時に常に起される、待遇の感情、美貌の感情など）や、自動、他動、受動、能動等の別や、構文論、品詞論上の機能などは、補助的な意味と考えられる。もし、これらの補助的な「意味」を、全く無視することができれば、すべての語彙を、一つの意味体系の中にそれぞれ配置することができるかもしれないが、ここでは、品詞論上の機能までを完全に無視することは不可能であった。（もっとも、これをすべて無視することは、もともと無意味なことで、品詞論上の区別のうちのあるもの、また、たとえば佐久間鼎博士の説かれるよう、注1) 表現機能の四種類に対応する語の分類などは、ここで試みるような「意味」の組み分けには、むしろ最初にとりあげられてよいものと考えるべきかも知れない。）ここに用いた第一次の品詞論的な組み分けは次のようなものである。

- I 名詞
- II 動詞
- III 形容詞・副詞及び形容動詞語幹
- IV その他（写生詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞・雑）

これは、必ずしも従来普通の文法学説によって、一貫した品詞分類を行ったものでもなく、かといって、それに異を立てるつもりのものでもない。いまのところ、意味上の組み分けに準じように試みたまでである。^{注3)}

上の各組の内部の細分は、いわば分類体辞書の体裁である。これは部分的には、専門領域における専門家の分類（たとえば日本動物図鑑、日本植物図鑑、商品辞典などの）を参考したが、全

§ 5.1

体的には、先例^{注4)}を求めたものでもなく、また多勢の論議をつくした結果でもない。しかし、この企ては、なるべく便利で妥当な、分類体辞書または類義語辞典が作られる時の、また文体論上の用語の偏りをはかる時の、物さしを作る第一着手なのである。^{注5)}

この試みでは、名詞の分類を中心として、できるだけ動詞・形容詞の分類をそれに近づけようとしたのであるが、やはり過不足があって、三者を総合することが結局できなかったのは前述の通りである。分類の各項には、とりたてて名前を与えず、グループごとに代表的な語を一字左に出して、それに小見出しの役目をさせることにした。それは必ずしもそのグループの語を総括する意味をもつものではないし、中にはもっと細かく見出しを掲げた方がよさそうな場合もあるであろう。一つのグループの中には中心的な意味において、同義と認められるものも類縁関係をもつと認められるものもふくまれている。なるべくは一つの小見出しに率いられる語が、多寡のないように心がけはしたが、分類作業の不手際は、一つには恐らくこの語彙（この調査における度数5以上の語の総体）が、限られた範囲に止まることを原因として、指摘されるであろう。そして、めいめいの読者のばくぜんと期待される、基本語体系からのずれも大きいことと思われる。

注1 § 3 の語彙表に収めたのは度数9およびそれ以上の語で、それらはこの表では「。」印を附してある。ここに度数5を限ったのは、分類を五千語以内の程度で試みようとしたからであって、統計的な意味ではない。

注2 佐久間鼎博士は、昭和21年10月の言語学会講演会における、「言語機能についてのワグ・サクマ学説」で、Karl Bühler の Ausdruck, Appel, Darstellung の三大機能に Lautmalende を加えられた。この第四機能に対応するのは、擬声語・擬態語である。なお、以下の品詞論的な組み分けにおいては、佐久間博士のコソアド体系に属する語は、名詞、連体詞、副詞等に分属させた。

注3 この分類のうち、「その他」の「写生詞」は、いわゆる擬声語・擬態語およびそれに準ずるものを探し、都竹都年氏の命名による。「副詞」は、いわゆる陳述の副詞にあたると思われるものである。

なお、数詞と固有名詞とを最初に除外しているが、それは表を簡潔にするためで、この分類のうちにそれをふくめるとすれば、名詞の下位分類の間でそれぞれ位置を与えることが出来るであろう。

注4 先例としては、Roget 及び Bally のものが、著名でかつ有益である。

Peter Mark Roget (1779—1869), その分類は、C.O.S. Mawson: Roget's International Thesaurus of English Words and Phrases または、Roget's Pocket Thesaurus に見られる。垣内松三『基本語彙学』昭和13年刊、に小学国語読本卷一ないし卷四の用語をその分類体系にあてはめた例が出ている。(6類、24項、1000目)

Charles Bally (1865—1947) のは、Traité de stylistique française, Vol. II. Appendix, Tableau synoptique de termes d'identification et de leur principaux synonymes. (10類、42項、297目) 以上の二種、ことに Bally の著では特に明らかに、具体名詞 (les mots purement concrets) が除外されている。

Carl Darling Buck の A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages, 1929 には、千語あまりについての比較的やさしそうな分類が施してある。(22類、152項) そのほか英仏和国語辞典や児童語彙研究の諸著における分類は、実用的ではあるがくわしくない。

日本語については、土居光知博士の基礎日本語千百語が分類体でも示されている。また動詞に関しては、

婦人雑誌の用語

- 分類語彙表は、語彙調査の結果を意味の観点から一覧するものである。
- 一語は、多義であっても1箇所にのみ配置する。
- 品詞も意味を構成する。その品詞間で通用する意味分野の設定はできなかった。
- 分類体辞書・類義語辞典に応用されることを狙っている。

§ 5・1

広島女子短期大学研究紀要（昭和25年）に、木原茂氏の、狂言本を資料とする「動詞の意味体系」がある。

注6 昭和28年2月の日本言語学会例会で、林はこの物さしを、白地図にたとえ、意味論に関する諸種の用途のために、意味の世界を見わたす便りとして、よりよき輪郭が描き出されるようになることを希望した。この白地図は、ある言語体系に属する一々の語がそれぞれの位置に書き込まれるためのもので、それは意味そのものを直接分類することによっても出来るかも知れないが、比較的平均した、かたよらない語彙を手がかりにして考え、その仕事を累積するということによっても得られると思う。われわれは後者によろうとするものであるが、以下に掲げる語彙表は、白地図そのものではもちろんなく、完好的な白地図の上に記入されたものでもなく、ただこの語彙表の上に境界線を引くことによって一つの試作的な白地図が得られようかというべきものである。

もしこのような意味の世界の分野が、より適切な形で画定されるならば、各領域に番号（たとえば十進番号—Roget や Bally でも索引のための番号がそれぞれのグループの見出しについている。）をつけ、意味の複合した語はその番号を記号で組合せることによって、すべての語の意味上の所属を、数字や記号で示すことができるかも知れない。

5・12 分類語彙表

総目	概数
I.1 抽象的関係	620語
I.2 人間および行為の場	350
I.3 精神および行為	600
I.4 生産物および用具	640
I.5 自然現象および自然物	420
II. 動 詞	1000
III. 形容詞、形容動詞、副詞	460
IV. 写生詞、連体詞、副詞、接続詞、感動詞、雜	190 合計 4280語

I.1 抽象的関係

これ。これら。其れ。あれ。どれ。どちら。か(も)。存在。事。対象。何。何事。事件。出来事。何物。項別項。前項。由。事実。真実。真。実際。現実。」本物。正体。実物。モデル。原型。」力。強力。勢い。効目。方法。法。術。標準。手段。手段。仕方。仕様。やり方。戻し方。付け方。切り方。持ち方。選び方。見分け方。導き方。書方。生き方。作り方。使い方。保存法。処法。洗い方。裁ち方。縫方。標付け方。読み方。染め方。料理法。お化粧法。旧。元。仮。他。ほか(外)。別。留守。空洞。裸附録。眞(跡)。焼け跡。裁目。縫目。針目。折り目。出来

上り。完成。状態。現状。有様。症状。様子。事情。実情。実態。趣。風。和風。洋風。中華風。修業振り。見かけ。気配。傾向。調子。具合。加減。火加減。按排。調和。釣合。都合。取り合せ。配色。アクリヤント。安否。差支え。最適。混乱。欠点。故障。むら。弛み。余裕。粘り。固さ。良。不良。美しさ。良さ。」内容。組織。有効成分。構造。中味。性質。素質。体質。品質。良質。質。上質。特徴(特長)。特色。性格。個性。種類。種類。例。」関係。基礎。根本。下地。仲。条件。原因。理由。故。因。動機。目的。所為。為。結果。効果。影響。」相違。違い。変り。」現われ。変化。上述。作用。働き。運動。動き。」

1.2 『総合雑誌の用語』

§4

1.100～125

分類語彙表

1.1

100 *これ。*この 本 当』 這般』
*それ。*その
*あれ。*あの かの』 こんな、そんな等→3.10
*どれ。*どの』 ここ、そこ等→17
*い、ずれ どちら。どっち』
かも』 あれこれ』

各々』 某→.20
*の。*もの。*方。前者 後者 分』
*何。何事 何物 何等』 何々』

1 対象 *事。事柄』 物事』

*物』 物件』
万事』 一事 万端 諸般』
*事件。出来事 大事 事故 沙汰』 大ごと 現事』

2 事項 項件』 条項 項目 由旨 儀 本件』

3 現象。事態』

*真 *実 *事実。*現実 *真実 *実際。』 史 実 情実』 →.13. 具体。まこと→.30

真理。』 形而上 諸行 有為』

*秘密。』 機密 枢密 枢機』

4 本物 自体 体』 正体 実体 実 物にせ 前身 個体 神体 機体』

*代表。候補 *代り。』 代理 身代り 助助 副 一』 主流 中堅 亜流』

資料』 史料 データ 標本』

一』 地 本位 本格』

一』 補欠 補充 補填』

*他 *ほか(他・外)。』 別個 別物 余儀 他人 ごと』 非→.3.10

110 類種 種類』 範疇 たぐい』

一種 各種』 同類 多種』

形式。様式 *式。流』 類型 タイプ』

象徴』 典型 模範。原型 モデル』

部門』 國別 性別 業種』

*例。事例 ケース 例外』 実例 特例 類例』

*階級。層級 クラス』 階層 職階 冠位』

標準。基準 (規範) *水準 レベル 上等 上層

高等 高級』 中等 下』

系 系統』 系列 血統』

1 *関係。仲』 間柄』

*関連 緑』 関与 相関 かかわり』

*基礎。*基本 *根本 根源(根元)』 根底 基幹 源泉 語源 本末』

*条件。前提 要因 根拠 抱りどころ 理由。わけ *原因。所以 故。もと。所為』 *何故 因起因 成因 死因 因縁 由縁』

*目的。*為。*目標』 目あて 用途 実用 乗用 軍用』

*結果。成果 *効果 *影響』 婚結 甲斐 効驗 応報 帰趨』 成績→.34

証拠。口實』 例証 反証 言質』

手段』

2 同一 一致 *違い 相違 異同 該当 同上 類似 合致 まぎれ 人違い 同業 同権 同郷 同好』

3 *相互 相対 合い』

連絡。結びつき つながり』 連結 連帶 連鎖』 一』 交錯 並行(併行) 対置 呼応 照応』

*逆 *反対 矛盾』 相剋 包含 融合 混合 相應 食いちがい。ずれ』

対日 対外 対』』 従属 所属 並』 付属。付隨 隸屬 直属 専属 被』 支配→.360. 独立→.124

120 一』 有無 あり合せ』

1 出現 登場 発生』 現前 きさし

*実現 現われ 復活 提出』 現出 再現 生起 抬頭 起き 自発 突発 勃発』

暴露』 開頭 露出 発露 発揮』

2 形成 樹立 結成』 創立 組閣 創設 発会』 創始→.1502 創造、創作→.320

新興』 再興 中興』 成功失敗→.343

3 成立 確立』 成否』

完成 既成』 出來 成就 済み』

解消 廃止』 やめ 全廃 廃校』

4 *存在』 存亡 存立 實在 實存』

一』 現行 既存 名残』

一』 普遍 偏在 散在 混在 在内』

*独立。自立 孤立 依存 共存』

*対立 *中立』 連立 亂立 遊離』

滞在 駐屯 駐留 留守』 在世 在住 寄留

駐日 進駐 在隊 在任』

消滅』 亡失 喪失 紛失 焼失 減亡 絶滅

抹殺 抹消 断絶 佚』

5 固有 *必要』

*維持 保存。保持 保全』 堅持 溫存 永持

第1表 五十音順語彙表

五見	十音順表し	使 用 率 (%)			相 对 精 度 (%)			分類目	
		全 体	I 竽	II 竽	III 竽	全 体	I 竽	II 竽	
アの	〔指〕	.629	.579	.692	.676	7.94	12.50	11.15	1-10
アア	〔指〕	.069	.050	.147	.047				3-10
アア	〔感〕	.117	.109	.084	.157				4-30
アイ	愛	.056	.034	.084	.079				1-30
アイ 1)	合	.056	.076	.063	.047				1-11
アイ	〔接頭〕相	.148	.126	.231	.126				1-11
アイ・ウ	合、会、逢、遭	.825-	.802	.908	.809	*10.82	*18.53	*16.96	*16.41
～		.800	.752	.908	.809				2-15
アエル		.017	.034	—	—				
アワレル		.009	.017	—	—				
アイコク	愛國	.087	.101	.042	.094				1-30
アイサツ		.056	.034	.105	.063				1-31
アイシ・スル	受	.169	.143	.084	.283	15.44			2-30
～		.156	.118	.084	.283				
アイサレル		.013	.025	—	—				
アイショウ	愛情	.104	.084	.021	.204				1-30
アイセン・ハワア	〔人〕	.035-	.042	.021	.031				1-209
アイダ	間	.894	.907	.986	.802	7.31	9.56	11.56	19.32
アイツ	〔代名〕	.030	.042	.042	—				1-17
アイテ	相手	.295	.285	.441	.204	13.17			1-20
アイドク	愛読	.039	.034	.042	.047				1-31
アイマイ	曖昧	.039	.042	.021	.047				3-30
エエテ	〔副〕	.069	.059	.063	.094				3-30
アオイ	青	.048	.050	.063	.031				3-50
アオリ・ル	煽	.035-	.042	.042	.016				2-50
アカ	赤	.069	.067	.021	.110				1-50
アカイ	赤	.165-	.118	.084	.315	19.36			3-50
アカジ	赤字	.048	.067	.042	.016				1-31
アカマ	〔人〕赤間	.148	.285	—	—				1-209
アガリ・ル	上・拳	.195	.176	.357	.110	17.59			2-15
アカルイ		.078	.076	.084	.079				3-50
アキ	秋	.087	.042	.168	.110				1-16
アキタ	(地) 秋田	.048	.050	.084	.016				1-259
アキラカ		.304	.327	.252	.299	12.30	15.08		3-50
アキラメ		.030	.017	.021	.063				1-30
アキラメル		.052	.050	.042	.063				2-30
アク	惡	.078	.059	.147	.063				1-30
アクカ	惡化	.030	.025	.042	.031				1-15
アクトク	惡徳	.035	.017	—	.094				1-30
アクマヂ	餌込	.082	.059	.126	.094				3-30
アクリル	〔液体〕型	.043	.042	.063	.031				3-16
アケル	開	.087	.067	.126	.094				2-15
アゲル	上・拳・揚	.517	.537	.776	.283	9.31	14.03	13.91	2-15
～		.460	.495	.671	.236				
アゲサセル		.004	.008	—	—				
アゲラレル		.052	.034	.105	.047				
アゲク	舉句	.030	.017	.063	.031				1-16
アサ	朝	.226	.143	.378	.267	16.94			1-16
アサイ		.043	.034	.063	.047				3-17
アサオ	〔人〕浅尾	.039	—	.021	.126				1-209
アサクサ	〔地〕浅草	.052	.076	.063	—				1-259
アサヒ	朝日	.117	.151	.084	.079				1-52
アシ	足・脚	.087	.185-	.210	.173	18.79			1-56
アジ	味	.069	.008	.189	.094				1-50
アジア		.230	.302	.063	.220	19.41	23.29		1-259
アシダ	〔人〕芦田	.069	.042	.231	—				1-209
アジワイ・ウ		.065	.050	.063	.094				2-30
～		.056	.042	.042	.094				
アジワワセル		.004	—	.021	—				
アジワフレ		.004	.008	—	—				

1) ニラミアイ / 合言葉などの。

1.2 『総合雑誌の用語』

§4

1.100～1.125

分類語彙表

1.1

- 100 *これ。*この 本 当』 這般』
 *それ。*その』
 *あれ。*あの かの』 こんな、そんな等→3.10
 *どれ。*どの』 ここ、そこ等→1.7
 *いざれ どちら。どっち』
 かも』 あれこれ』
 各々 個々』 某→.20
 *の。*もの。*方。前者 後者 分』
 *何。何事 何物 何等』 何々』
 1 対象 *事。事柄』 物事』
 *物』 物件』
 万事』 一事 万端 諸般』
 *事件。出来事 大事 事故 沙汰』 大ごと 現事』
 2 事項 項件』 条項 項目 由旨 儀本件』
 3 現象。事態』
 *真 *実 *事実。*現実 *真実 *實際。』 史実 情実』 →.13. 具体、まこと→.30
 真理。』 形而上 諸行 有為』
 *秘密。』 機密 枢密 枢機』
 4 本物 自体 主体 体』 正体 実体 実物 にせ 前身 個体 神体 機体』
 *代表。候補 *代り。』 代理 身代り 助助 副 一』 主流 中堅 亜流』
 資料』 史料 データ 標本』
 一』 地 本位 本格』
 一』 補欠 補充 補填』
 *他 *ほか(他・外)。』 別個 別物 余儀 他人ごと』 非→3.10
- 110 類種 種類』 範疇 たぐい』
 一種 各種』 同類 多種』
 形式。様式 *式。流』 類型 タイプ』
 象徴』 典型 模範。原型 モデル』
 部門』 國別 性別 業種』
 *例。事例 ケース 例外』 実例 特例 類例』
 *階級。層級 クラス』 階層 職階 冠位』
 標準。基準(規範) *水準 レベル 上等 上層 高等 高級』 中等 下』
 系 組織』 系列 血統』
 1 *関係。仲』 間柄』
 *関連 緑』 関与 相関 かかわり』

— 51 —

§4

分類項目一覧

前掲の分類語彙表で、分類された各グループが大体どのような意味の範囲にはいるかを、簡単な見出しことばで示す。ここに見出しとして掲げたことは、調査で得られたものには限らない。

1. 名詞

1.1 抽象的関係

1.100	コソアド	.1520	過程・経路	.1642	過去
1	物事・項	1	推移・移動	3	将来
2	現象・真	2	進行	50	順序
3	自体・別物	30	出入り	1	終始
110	種類	40	上下・昇降	2	新旧・前後
1	関係	50	離合	3	歴程
2	同異	1	開閉	.1700	空間
3	相互	60	接触	1	地点
120	有無	1	圧迫	2	範囲
1	出現	2	障害	3	境界
2	生成	70	変形	10	方向・方位
3	成立	1	増減	1	左右
4	存在・消滅	2	発達	2	中外
5	必要・保存・廃棄	.160	位置・場合	20	面・側
130	状態	10	時	1	内外
1	外観	1	都度	30	付近
2	内容	20	期間	.180	形
3	性質	1	時代	1	枠
4	秩序・調和	30	年	.190	量・数
140	力	1	季節	10	数
1500	作用・変化	2	月	1	多少
1	革新	3	週間	20	単位
2	開始・終了	4	日	30	全体・部分
3	継続	5	昼夜	1	過不足
10	運動	40	古今	2	程度
1	転位	1	現在		
1.2	人間活動の主体				
1.200	自・対・他				
10	人間	.2140	親類	.241	職業
1	神仏・精霊	.220	相手	10	専門的・技術的
20	男女・老少	1	主客	1	支配的・管理的・書記
.230	国民・市民・住民				
1	人民				
210	家族				
10	夫婦				
20	親				
1	子				
30	兄弟				
.240	成員				

— 74 —

4 意味から見た語彙の構造

われわれはこの報告書の前編（国立国語研究所報告12）に、五十音順及び使用率順の語彙表を掲げたが、これら総合雑誌の語彙調査で得られた語の総体は、意味の上から見て、どのような種類のものから成っているのであるか。これについて、全体の見渡しができるように作った一覧表が、51ページ以下に掲げる分類語彙表である。ここに少しく分類語彙表について説明しておきたい。

ここに分類語彙表といふのは、一般に一つの言語体系の中で、単語がそれぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る限りの意味を分類して、その各項にそれぞれの単語を配当したものである。

かような一覧表は、いわゆる同義語・類義語が同一のまたは近隣の項の中に収められるものであって、いわば類義語集をなすのであるが、普通の辞典のように、語の音形または表記形を手がかりとして排列したものでないことが一つの特色である。従って、実用的に表現辞典、詞藻辞典としては検索に不便であることはやむを得ないが、それは索引の工夫によって補われるであろう。しかしそれよりも、かような一覧表には次のような役目がある。その一つは、生活のまたは意味上の各分野から、適切な単語を選んで基本語彙を設定しようとする事業のために、偏りのない全体の見渡しを与えるとする。（基本語彙の設定は、ひいて基本文字の問題にも関連する。）そのためには、分類の各項におけるそれぞれの語の重みが、語感からも能率からも比較商量される必要があるとともに、分類各項相互が、生活の中でどのような地位を占めるかが考えられるように、分類がなされていなければならないが、とにかく各分野を余すところなく見渡すことによって、生活に基本的に重要な語を選び出すことができるであろう。また、基本語彙といわないので、日常の用語における表現の過不足も、かような一覧表のわく組によつて明らかにされるであろう。また、類義語の間のつりあいも、広い範囲、狭い範囲のいろいろの段階で見ることができるのである。このことは、ひいて或る言語主体（個人にしても社会にしても）の語彙の構造を明らかにすることになり、もし分類が十分妥当であるならば、異なる言語主体の間の語彙比較の物さしとなるであろう。これは、作品の文体論に関連し、さらに、言語の問題をこえて、それぞれの社会の精神構造を追求するための基礎に役立つであろう。

51ページ以下に掲げる分類語彙表は、上のような実効を持つ分類語彙表への一つの試みといふべきものである。

この分類語彙表は、報告書前編の五十音順語彙表に掲げた各語を、意味の分類の各項目に配分したものである。その「意味の分類」は、国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』(1953) の§5・1分類語彙表に試みたものを修正したものである。大きな違いは、彼の写生詞と連体詞

§ 4

と副詞の或るものとを、形容詞の群へ入れたこと、比較的大きな分類項目に彼の場合よりも細かい番号を与えたこと（前編の五十音順語彙表の「分類目」の数字はこの番号で、従って五十音順語彙表はこの分類語彙表の索引の役目をする）、名詞の群、動詞の群、形容詞の群等のそれぞれの内部では、互に連関するものを明らかにするために、それぞれほぼ同様の分類に整理し、番号をなるべく共通にしたこと（これは群の区別を撤廃することができないわけであることを示す）、などである。

なお、大切なことは、婦人雑誌の分類語彙表の場合には α 単位の語を取め、このたびの分類語彙表には、この報告書§2・3に説明するような β 単位の語を収めたことである。従って、この総合雑誌の場合には、婦人雑誌の場合と同様《気をつける、筆をとる、ピンからキリまで》のようないわゆる慣用句が、表の中に現われないことはほかに、婦人雑誌の表にはある《お化粧法、看護婦、民主主義》のような合成語も、ここでは《お、化粧、法、看護、婦、民主、主義》のように分解されて、合成された全体の形としては現われない。これは、今のところ、純粹に意味上の単位を設けることが困難で、ことばの形式的な面を手がかりとする統計のための単位分割に従ったからであって、類義語集としては不十分であることを免れない。（重要な概念がこの表に見当らないとすれば、それはこの調査の範囲では、その概念が重要なものとして現われなかつたか、または β 複合として表わされていたか、のどちらかである。但し、そのような β 複合の合成語を掲げないというのは、この表においてのことであって、調査全体としては、組合せについての調査が、語構成の章のためには準備されている。）

(1.) (2.) (3.) (4.) の別は、おおむね文法上の品詞別によるものであるが^{補注1)}、(1.) と (3.) の間では、特に名詞と形容動詞語幹との間に解釈の動搖が残っているかもしれない。

意味の上から見ると、ほぼ次のようになる。

名詞の群 (1.) には《何、何ごと、何もの、どれ、だれ、いつ、どこ、いくつ》等の概念を表わす語と、それらを問としてその答となるべき語とを収める。

動詞の群 (2.) には《ある》に関連するものほか、《どうする、どうなる》等の答となるべき語を収める。

形容詞の群 (3.) (文法的には形容動詞の語幹、副詞の或るものも含む) には、《ない》に関するほか、《どう、どんな(に、だ)》等およびその答となるべき語を収める。

その他の群 (4.) には、(1.) の概念との間の、また叙述されるべき事柄と事柄との間の関係づけや、感動や、判断・期待・仮定など叙述態度についての予告や、呼びかけ応答や、待遇や、を表わす語を収める。

婦人雑誌の語彙分類をはじめ際には、まだ分類のわく組が出来ておらず、かつ類義語目録の先例として爾雅、節用集等の古い分類辞書の類か、土居光知博士の基礎日本語、ROGET のThesaurus ぐらいしか知らないので、四千三百語の中で類義語を集めながらわくを組み立てていった。(もっともその前に、『日本語基本語彙』(国際文化振興会) の二千語について同様のことを試みてはいたが、このわく組は、また別にたとえれば、いわば精粗のつりあいが

1.2 『総合雑誌の用語』

§ 4

悪いにしても、海岸線と行政区画の線だけを表わした白地図のようなもので、このたびの総合雑誌の語彙の場合には、この白地図の上に、区画を修正しながら、前半の調査で得られた一万六千語を書きこんでいったことになる。そこでは、思考や行為に関するもののように、婦人雑誌の四千語の場合よりずっと細かく区画をしなければならなくなつたものもあり、また衣食住に関するもののように、一区画の中の語の密度がずっと小さくなつたといふようなものもある。

分類項目の番号は、五十音順語彙表との対照上では、小数点以下2けたまでしか与えなかつたが、実際の分類はもう少し細かいものになつてゐる。分類された各項の排列は、分類そのものとともにまだ非常に個人的な考えにもとづくものであつて、多くの人を十分に納得させるまでには至らないであろうと思う。恐らく、かような分類表は、それを試みる個人によってそれぞれ異った形で現われるであろう^{補注2)}。ここではしかし、かような一覧表の試みについての刺激になることを期待する。

小数点以下の大きな分類についていふならば、ここに分類の対象となるものは、人間の言語（ここでは日本語）によって切り取られた、大世界を構成する大小種々の部分的な完結体であつて、それは、人間活動に関する部分と、そのわくに関する部分（.1）とに大別される。人間活動は、活動の主体であるもの（.2）と、その活動の様相（.3）と、その活動の相手として存在するものとの三つの観点で分けられる。そのうち、最後のものは、人間が直接に活動の結果として作り出した物または作り出すために利用する物（.4）と、そうでないもの、人間の主体的活動からは比較的自由に、外界として存在するもの（.5）となる。ここまでで、次の5部門が立てられたわけである。

- .1 抽象的関係
- .2 人間活動の主体
- .3 人間活動—精神および行為
- .4 生産物—結果および用具
- .5 自然—自然物および自然現象

各部門の間の区別は、常識的に比較的明らかであると思われる。所属が問題になる語は、多分に譬喩的用法を持つものであつて、その際臨時の譬喩はもちろんのこと、その用法が慣用的であつても、一方に原義の用法が一般にあると認められる時は、つとめて原義によって分類位置を定めた。《爆発、冷却》などが心理的な意味に用いられても、自然の部門に収めたごとくである。

各部門の内容が、さらにどのように分類されているかは、実際に分類表に当つて見られることを望むが、それを原理的に述べることは至極困難である。その排列（番号づけ）は、各項は必ずしも一列には相接続してはいないから、土地に番号をつけるよりもはるかにむずかしいと思われる。しかも個々の語の持つ意味上の領域は、互に他を犯さないようなものではなく、広がりにおいて大小種々であるから、白地図の平面の上に書き入れていくには無理がある。ここでは、数個の分類項の意味を総合した意味や、それらの意味に共通した性質、共通した部分に關

1.2 『総合雑誌の用語』

§ 4

する意味は、多くは、それらの分類項に先立たせて、一つの項を設けた。たとえば(1.56)は動物及び動物のからだに関する部分であるが、(560)は(561)の各種動物に対する総記の部分であり、(5620)は(5621~27)の身体各部に対する総記の部分である。番号によって項目を細分しないものにあっても、なるべくこの方針によって排列した。

この表で語を分類するに際しての「語の意味」というのは、それぞれの用例を通じて認められるところの意味であって、いわば個々の事物に対して常にあてはまるような概念である。個々の用例の前後文脈から汲みとられるその場の具体的意味は排除し、また自動・他動・受動・能動（このたびの調査には《れる、られる、せる、させる》を β 単位の内部の要素として含めた）の別や、待遇その他の語感の差などは無視した。（従ってこれらの区別しか持たない語は、たとえば《私、僕、俺…1.200》や《変る、変える、変ずる…2.1500》や《そむく、そむかれる…2.1511》のように、それぞれの仲間を通じての中心的意味の分類区画の中に、同居することになる。）

語の用法は多岐で、その辞書的意味も一語についていくつも数えあげられるものがある。このたびの調査でも、まだ一語一語の意味の分析には十分及ぶ時間がなかったので、著しいものについては実例によってそれぞれの分類項の中に分置したが、多くの語はその中心となる意味についてそれぞれ一箇所に収めたのみである。（従って以下の表でも、或る一箇所に収めた語がその一箇所にしか掲げられていないからといって、第二の意味では用いられなかつたものということは、厳密には出来ない。）

なおもう一つ述べておくべきことは、この意味の分類と語の排列では、個々の語それ自身のもつ意味が問題になっているのであって、その語が用いられる生活場面で他の語といかに交渉するかが度外視されていることである。語の中には、用いられる生活領域の固定したものもあるが、いろいろな生活領域で用いられるはずの語も多い。生活領域を分類して、それに語を分配する方法は、会話書のような日常の実用にとって有効で便利な方法であるが、むしろわれわれは、いろいろな生活場面を通じて一つの意味がどのような語として現われるかに関心を持つ。そこで生活領域の分類よりも先に、語の意味を分類しようとした、さらに、我々がともすればおちいりやすい連想、用いられる生活場面の想起から連鎖的に他の種類に属する語を喚起することを、できるだけ避けようとした。たとえば、《ビール》については、《酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔》等々が連想の網の中に捉えられるであろうが、この複雑な目を持つ網はこの一語のために大切なものであっても、《飲む》や《コップ》にとっては同様に有効なものとはいえない。ここでは、右の各語の中から、《ビール》と同類項をなすものとして《酒・スタウト・ウイスキー》のみを選び出すことにしようとしたのであって、いわば生産物に関しては、その中心意味の重点を用途に求めたものともいえるであろう。

以下の中は、本來、この総合雑誌の語彙調査の前半に得られた延べ十二万語に対する、異なり一万六千語について作ったものであるが、今ここに掲げるに際しては、報告書の前編の五十

— 48 —

§ 4

音順語彙表(11~95ページ)に収めた四千二百語を特に採り上げて示すこととし、それ以外に調査の前半後半を通じていずれかに現われた語のおもなものを選んで、付載することとした。それによって、分類のわく(白地図における境界線)が明了さを加え、かつ、総合雑誌における多度数語の性質が見やすくなるであろうと思われたからである。



表の体裁について述べると、

行頭の数字は前編の五十音順語彙表の分類目に示した番号の、小数点以下2けたと、同一番号のうちを更に細分して番号を与えた場合の、第3、4けたである。細分の場合、第1、2けたは多くを省記した。

同番号の項の中も、小グループごとに、行をかえて一括した。

」はその小グループの限りを示す。

』の前に掲げるものは、標本使用度数7(使用率0.030%)以上の語(五十音順語彙表に載せた語)。——は、そのグループに該当の語がないことを示す。

そのうち、頭に*の印を加えたものは、標本度数30(使用率0.130%)以上の語。

』の後に掲げるものは、標本度数6以下の語(の一部)。

以上のうち、尾に。の印を添えたものは、『日本語基本語彙』(国際文化振興会、1944年)の二千語に含まれた語。

(の後に掲げるものは、この調査では得られなかつたが、『日本語基本語彙』にある語補注3)。

この表に掲げた語の表記は、便宜に従つたものである。(表記及び用字についての分析は別に報告の機会を待つ。)

なお、この分類語彙表の後に、分類項目一覧を添えて、この分類が全体としてどのような形のものであるかを、大体から示すこととした。その項目一覧に掲げる番号は、もとより分類語彙表の番号そのものであるが、その番号のものと掲げる語は、ただその分類されたグループが、どのような意味分野に属するものかを示すための見出しだし、必ずしもこの調査で得られた語ではなく、従つて分類語彙表に掲げられた語とは限らない。うまく選ばれているとすれば、各グループの総記の部分に位置を占めるはずのものである。

補注1(46ページ) 品詞別を最初の分類基準とすることは、概念を分類する上では賛成を得られないかも知れない。前述のように、各群で排列番号を平行させたことは、品詞別を撤廃する可能性を或る程度示すことになると思う。しかし、実際の分類の手続上、 β 単位の語を手がかりに考えている間、動詞の陳述の機能や、形容詞の修飾の機能をとり去って名詞との間に比較対置することは、『動く一動き』『美しい一美』などのような限られた語の場合を除いては、はなはだ困難であった。(《よさ》等は形容詞群に入れることにしておいた。)

補注2(47ページ) 順義語目録の先例として、『婦人雑誌の用語』264ページに掲げた、ROGETやBALLYのもののか今は次のような例を知ることができた。

Franz DORNSEIFF: Der Deutsche Wortschatz nach Sachgruppen, Berlin, 1954.

Rudolf HALLIG, Walther von WARTBURG: Begriffssystem als Grundlage für die Lexikographie (Versuch eines Ordnungsschemas), Berlin, 1952.

— 49 —

婦人雑誌から総合雑誌へ

- 語が、 α 単位でなく、 β 単位になつた。

長い複合語が現れなくなつた。

- 分類項目を細かくして名称・番号を付け、品詞間の関連が分かるようにもした。

五十音順語彙表にもその番号を記載した。

- 意味の世界の全体における高頻度語が分かるように、関連語彙も掲載した。

」

1.3 初版『分類語彙表』

第1表 五十音順語彙表（助詞・助動詞以外）

意味分類	見出し	使用率 (%)						備考
		全體	一層	二層	三層	四層	五層	
3100	アの [指]	.787	.934	.771	.119	.542	1.256	0 1 #2 4 5
4310	ア、アア [感]	.242	.109	.183	.024	.172	.472	0
3100	アア [指]	.062	.152	.039	.036	.037	.073	
3112	アイ 相	.135-	.152	.144	.191	.111	.106	0
1302	アイ 愛	.098	.109	.118	-	.209	.080	
21550	アイ・ウ 合・会・逢	.872	1.000	.875	.250	1.023	1.096	0 1 2 4 5
	～	.826	.913	.862	.250	.924	1.050-	
	アワセル	.014	-	.013	-	.049	.007	
	エール	.032	.087	-	-	.049	.040	
21500	アイカワリ・ル ¹⁾	.044	.022	.026	.024	.025-	.080	
1209	アイク [人] Ike	.027	-	.013	.083	.012	.020	
13121	アイサツ 接拶	.096	.109	.091	.024	.037	.166	
2302	アイシ・スル 愛	.155	.065	.118	-	.234	.246	0 5
	～	.135-	.065	.078	-	.185-	.233	
	アイサレル	.021	-	.039	-	.049	.013	
1302	アイジョウ 愛情	.142	.065	.183	-	.259	.159	0
13114	アイジルシ	.016	-	-	-	.086	-	
13030	アイソウ 愛想	.021	-	.013	-	-	.053	
1176	アイダ 間	.695-	.854	.771	.441	.690	.752	0 *1 2 3 4 *5
1259	アイチ [地] 愛知	.027	-	.039	.048	.012	.027	
1200	アイツ [代名]	.050	.087	.052	-	.025-	.080	
1220	アイテ 相手	.429	.326	.314	.179	.271	.744	0 5
13061	アイデア	.025	-	.039	.012	.025-	.033	
13150	アイドク 愛読	.048	-	.039	-	.037	.100	
3165	アイニック 相憎	.025	.022	.039	.012	-	.040	
3306	イマイ 瞬昧	.021	.109	.039	.012	-	-	
	～	.018	.109	.039	-	-	-	
	～サ	.002	-	-	.012	-	-	
13852	イヨウ 愛用	.016	.022	.039	-	.012	.013	
1454	イヨン	.039	.065	.013	-	.160	-	
23394	エギ・グ	.021	-	.013	-	.012	.047	
3346	エテ [副]	.030	.043	.026	.036	.012	.024	
1502	オオ 青	.021	.043	-	.024	.025-	.020	
3502	オオイ	.078	.043	.078	-	.074	.133	
	～	.073	.043	.078	-	.062	.126	
	～サ	.005-	-	-	-	.012	.007	
1209	オオキ [人] 青木	.059	.043	-	.095	.012	.100	
23393	オオギ・グ 仰	.018	-	.026	-	.025-	.027	
1209	オオタ [人] 青田	.018	-	.039	-	-	.033	
1259	オオモリ [地] 青森	.027	.022	.013	.024	-	.053	
2140	オオリ・ル	.016	.022	.026	.024	-	.013	
	～	.014	.022	.026	.012	-	.013	
	オオラレル	.002	-	-	.012	-	-	
1502	オカ 赤	.164	.065	.118	.072	.505	.086	0 4 5
3502	オカイ	.144	.174	.065	-	.234	.206	0 5
13113	オカジ 赤字	.057	.022	.026	.226	-	.020	
1181	オカセン 赤線	.016	-	.013	.012	.025-	.020	
11635	オカツキ	.016	.022	.013	.012	.012	.020	
1273	オカズミイ	.023	-	.013	.060	.012	.020	
1460	オカリ 明・灯	.025	.022	.013	.048	-	.033	
11540	オカリ 上	.018	-	-	-	.049	.027	
2154	オカリ・ル 上・揚・膳	.231	.152	.144	.191	.160	.362	0 5
	～	.228	.152	.144	.191	.160	.352	
	アガラセル	.002	-	-	-	-	.010	
3501	アカルイ	.235	.326	.235	.155-	.320	.206	0 5
	～	.219	.304	.196	.143	.308	.199	
	～サ	.016	.022	.039	.012	.012	.007	
1205	アカンボウ	.034	.043	.052	.012	.037	.033	
11624	アキ 秋	.242	.217	.091	.203	.185-	.379	0 5
11251	アキ 空・開	.039	-	.013	.012	.172	.007	

1) 相変ラズ / 相変りませず等。

意味分類	見出し	使用率 (%)						備考
		全體	一層	二層	三層	四層	五層	
21553	アキ・ク 開・空	.062	.043	.065	.024	.049	.093	
2300	アキル 鉢・巻	.018	.022	-	-	.037	.027	
1209	アキコ [人] あき子	.018	-	.026	-	.037	.020	
1209	アキコ [人] 明子	.023	-	-	-	.086	.020	
1259	アキタ [地] 秋田	.032	.022	.026	-	.037	.053	
1171	アキドマリ [裁縫]	.037	-	-	-	.197	-	
1209	アキヤマ [人] 秋山	.027	.022	.026	-	.025-	.047	
1209	アキラ [人] 明	.037	-	.026	.012	.012	.080	
1209	アキラ [人] 朗	.016	.043	.013	-	.012	.020	
3501	アキラカ	.151	.304	.170	.238	.037	.106	0
23041	アキラメル	.064	.087	.052	.012	.037	.106	
	～	.062	.087	.052	.012	.037	.100	
	アキラメラレル	.002	-	-	-	-	.007	
2301	アキレル	.032	.043	.013	-	.062	.040	
	～	.030	.043	.013	-	.049	.040	
	アキレサセル	.002	-	-	-	.012	-	
13046	アク [人] 悪	.059	.152	.078	.036	.025-	.053	
11502	アクカ 悪化	.018	-	.013	.060	-	.013	
13390	アクシユ 握手	.023	-	.052	-	.025-	.027	
1428	アクセサリ	.037	-	.052	-	.111	.020	
13112	アクセント	.032	-	-	-	.012	.136	.013
1209	アクタガワ [人] 芥川	.021	.043	-	-	.012	.040	
1203	アクママ 悪魔	.023	-	.022	.012	.025-	.027	
3346	アクマデ 飽笠	.057	.043	.091	.048	.062	.047	
3165	アクル [連体] 翼	.016	-	-	-	-	.047	
216	アケル ¹⁾ 明	.037	.043	.039	-	.062	.040	
21553	アケル 開	.187	.109	.157	.072	.234	.266	0 5
	～	.178	.065	.144	.072	.234	.259	
	アケラレル	.009	.043	.013	-	-	.007	
11540	アゲル 上・擎	.021	-	-	.012	.099	-	
	～	.058	.478	.575-	.548	.845	.714	0 1 2 3 #4 #5
21540	タゲル 上・擎	.658	.478	.575-	.548	.845	.714	0 1 2 3 #4 #5
	タゲル	.588	.456	.496	.429	.827	.634	
	アゲサセル	.005-	-	.026	-	-	.010	
	アゲラレル	.003	-	-	-	-	.070	
11651	アゲタ	.037	-	.026	.024	.012	.073	
1213	アコ 吾子	.016	.087	-	-	.037	-	
15711	アゴ 頤・顎	.046	.043	.026	-	.025-	.093	
13020	アコガレ	.021	.043	.013	.012	.012	.027	
2302	アコガレル	.030	.065	-	-	.037	.047	
	～	.027	.043	-	-	.037	.047	
	アコガレラレル	.002	.022	-	-	-	-	
1665	アコガレラレル	.002	.022	-	-	-	-	

2・5 意味分類の項目を求めるこ

語を意味によって分類した表を、別の分冊に掲げるが、第1表に見出しとして掲げてある語の範囲では、語が意味分類語彙表のどの分類目の所にあげてあるかを知るために、第1表が利用出来る。すなわち知らうとする語を見出しに持つ行の、左端の「意味分類」の欄に、その分類項目番号がしるしてある。(この意味分類表は報告13の§4に掲げた表に相当するが、分類番号の与え方は一部改めた。)

なおこの方法で意味分類語彙表のその分類目の所を見ることによって、その語の類義語・対義語の大体を知ることが出来る。

1) 夜がアケル / 年がアケル。

まえがき

分類語彙表の意味

ここに分類語彙表といふのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。すなわち、その分類の各項には、同義の単語が集められることになるので、これを同義語類義語集または同義語類義語目録とよぶこともできよう。

かような分類語彙表の先例としては、東洋において古く爾雅があり、その流れを汲んで日本でも和名類聚鈔や節用集などの分類体の古辞書がある。また西洋においては、有名な Roget's Thesaurus そのほかの多くの語彙表や辞書が行なわれている。(付記参照)

それらの表は、それぞれ独特的の分類によって項目が排列されていて、単語を検索するには、別に五十音順とかつづり字順とかの索引を必要とするものである。中には類義語辞典として、分類各項目の見出しのつづり字によって項目を排列し、検索をたやすくしたものもあるが、そのような種類では、項目間の類別について一覧することができない。

さて、かような同義類義の単語の目録には、次のような役割がある。

まず第一に、表現辞典、詞藻辞典としての役割であって、従来の実用的な類語辞典の類は、ほとんどそのためのものである。すなわち、会話や作文の際、適当な、またはより適切な表現を選び、また同一の表現の單調な繰返しを避けるために、用いられるのである。

第二には、ある種の方言辞典にその試みがあるように、方言の分布や命名の変遷を知る手がかりとしての役割である。同じまたは類似の語形がどのような意味において分布するかは、つづり字順の辞書で追究されるであろうが、ここでは一つの意味、一つの分類項目について、どのような命名が分布し、どのように変遷したかを知るのである。いわば方言地図そのものであるが、一国内の方言に関するだけでなく方言間の比較研究でも、また文献に徴する史的研究でも、かような形での整理が便利である。

第三には、ある個人またはある社会の言語体系もしくはある言語作品について、表現上の特色を見る物指しとしての役割である。このような「意味の一覧表」に語彙をあてはめてみると、表現の過不足や、用語の特徴的な集中が明らかになるであろう。そして、もし分類が十分妥当であるならば、異なる作品の間とか、異なる言語体系の間とかの語彙対照の物指しとなり、一方では作品の文体論に関係し、一方では、それぞれの言語社会の精神構造や生活構造を解く基本的手段となるであろう。族制語彙とか、色彩語彙とかいう、一部のまとまった項目についての研究もあるが、それを語彙の全領域に及ぼして考えるのである。

第四には、これがわれわれの主要な関心点であるが、基本語彙設定のための基礎データとしての役割である。これは第三の役割と関係するところ密接であるが、一国語の基礎語彙は、生活上のまたは意味上の各分野から、最も適切な単語を選ぶことによって定められなければならない。そのためには、表現されるべき世界、意味の全分野が、偏りなく余すところなく見渡されなければならない。そこに分類一覧表があつて、その各項に収める語

まえがき

句の重みが、その必要性や、はたらきや、語感など、また実際の使用率や使用範囲などの観点から、互いに比較商量されることになる。すなわち、類義語間のつりあいを、広い見渡しの上で、狭くも広くも見ることができ、したがって適切な語の選択ができるということになるであろう。ある特定の観点から広く語を拾いあげるには、五十音順の辞書からでは、何としても偏りを免れないものである。

なお、このような分類表は、辞書編集における解説作業に寄与する。その辞書が、辞書の体裁として、五十音順であるにせよ A B C 順であるにせよ、意味の解説にあたっては、少なくとも類義語関係を無視してはならないのであって、そのためには、語の選択ばかりでなく、かような分類目録が利用されるべきである。

また、分類を妥当に組織立て、かつ分類項目に系統的に番号を与えることは、翻訳や情報処理たとえば文献要約などの機械化の一つの方法に、基礎的な作業となるものである。これは、近い将来の重要な問題で、すでに Roget's Thesaurus を利用した試みが報告されている。

2	事務局長は、機関園の一般の官吏 又は相当の資格を持つ科学者のうち から、内閣監理大臣が命ずる。
3	事務局長は、会長の命を受けて、 事務を掌理する。
4	事務局の職員の官職については、 別に法律で定める。
附則	
1	この法律は、昭和二十四年一月二 十日から施行する。
2	学識経験のある者のうちから命ぜ られた第一回の委員で、日本学会會 議の会員である者は、任期は、第四條 第五項の規定にかかるわらず、二年と する。
3	事務局の職員の官職については、 國家行政組合法(昭和十三年法律 第一百二十号)が施行されたならば、 第八條第四項の規定にかかるわらず、 政令で定めるところによる。
4	内閣監理大臣 吉田 勝茂
大蔵大臣 大臣時代代理 外務大臣 音田 茂	大蔵大臣 大臣 國務大臣 大臣 法務大臣 菊田 勝茂
建設大臣 厚生大臣 農林大臣 運輸大臣 労働大臣 建設大臣 通商大臣 周東 周東	大蔵大臣 普吉 春三 小澤佐重喜 俊郎 勝茂 岸田甲子七 英雄
内閣總理大臣 吉田 勝茂	内閣總理大臣 吉田 勝茂
公布する。 昭和二十三年十一月二十日 内閣總理大臣 吉田 勝茂	公表する。 昭和二十三年十一月二十日 内閣總理大臣 吉田 勝茂

2	研究所は、文部大臣の所轄とする。 文部大臣は、人事及び予算に関する 事項に係るものと除くほか、研究所 の監督をしてはならない。
3	研究所は、文部大臣の所轄とする。 文部大臣は、人事及び予算に関する 事項に係るものと除くほか、研究所 の監督をしてはならない。
4	研究所は、次の調査研究を行 う。 第一 現代の言語生活及び言語文化に 関する調査研究 第二 語彙の歴史的発達に関する調査 研究 第三 語教育の目的、方法及び結果 に関する調査研究 四 新聞における言語、放送における 言語に関する調査研究 五 研究所は、前項の調査研究に基 づく事業を行う。 一 國語政策の立案上参考となる資 料の作成 二 國語研究資料の集成、保存及び その公表 三 現代語辞典、方言辞典、歴史的 國語辞典その他の研究成績の編集及 び刊行
5	(調査研究の委託)
6	第三條 研究所の事業は、他の研究所 又は個人によって既に行われ、又 は現に行われている同種の調査研究 と重複しないことを察明する。 研究所は、前項の重複をさけるた めに、前條第一項各号の一に該当す

2	評議員会は、二十人の評議員 で組織する。
3	評議員は、國家公務員法(昭和二 十二年法律第二百二十号)の定めるこ とにより、学識経験のある者のうち から、文部大臣が命じ、又は委嘱す る。
4	評議員となることができない。 評議員の任期は、四年とし、二年 ごとにその半数を改選又は改選す

法律第115号

國立國語研究所設置法

(目的)

第一條

國語及び國民の言語生活に関する
科學的調査研究を行い、あわせて
國語の合理化の確実な基礎を築く
ために、國立國語研究所(以下研究
所という。)を設置する。

第二條

研究所は、次の調査研究を行
う。

第三條

研究所は、文部大臣の所轄とする。

文部大臣は、人事及び予算に関する
事項に係るものと除くほか、研究所
の監督をしてはならない。

第四條

研究所に所長を置く。

第五條

所長は、毎年少くとも一回、
調査研究の状況及びその成果に關す
る報告を公表しなければならない。

第六條

所長は、文部大臣が命ずる。

第七條

所長は、毎年少くとも一回、
調査研究の状況及びその成果に關す
る報告を公表しなければならない。

第八條

所長は、前項の重要事項について
計画、調査研究の委託その他要請事
項について審議し、所長に助言す
る。

第九條

所長は、評議員会の助言を求める
場合は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十一條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十二條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十三條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十四條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十五條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十六條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十七條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十八條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第二十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第三十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第四十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第五十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第六十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十二条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十三条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十四条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十五条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十六条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十七条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十八条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第七十九條

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第八十条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

第八十一条

所長は、評議員会の議決を以て所長
の命令に准ずる。

1.3 初版『分類語彙表』

まえがき

ば) (1.57) は身体に関する部分であるが、(1.570) は、(1.571~8) の身体各部位に関する総記の部分をなす。

かのような分類項目は、実は分類排列の原理が確立されていないままになされたものであり、時として立案者自身にも不満を覚えさせる場合がある。たとえば (.12) の中の《出現》や《消滅》などは、(.15) の《変化》の類に含めてもよろしかるべく、また (.58) の《生死》なども、《変化》にあわせることも考えられるであろう。さきに譬喩的用法についてふれたが、人間活動や自然現象としてまとめたものの中に、(.1) の《関係のわく》に入れてよいものもありそうである。

さらに、分類各項目に収めた語句については、趣旨としては、類義同等のものは同一項目に収められるべきものであって、努めて集合をはかったが、なお別の項目に分属したままになっているものがあるであろう。その多くは、共通部分をもつ複合語の組で、一つの語については前部分を重視し、他の語については後部分を重視したというようなことから生じた不手際である。

なお、従前の研究所報告 (4.13) における分類語彙表では、一つの語形は一つの項目にしか掲げなかった。すなわち、一つの語については一つの意味しか取りあげなかつたのであるが、このたびの分類語彙表では、ある程度、多義を考慮して、一つの語でもいくつつかの項目に掲げたものがある。先にあげたくやく>もその例といってよい。また今の複合語、たとえば《言い直す》を (2.312) の《言語》の項と (2.1501) の《改革》の項とに両掲したようなものもある。もとよりこれらも十分精到なものではない。

複合語のうち、《真善美》や《和敬清寂》のように、ちがった範疇に属する語がそれぞれ独立しつつ複合しているものでは、それぞれの語をそれぞれの項目に分出しないわけにいかなかつた。《公序良俗》のような結合も、もとより《公序》と《良俗》とにわけて考えることにした。

なお、一つの項目中に収めた語の性質について、つけ加えておきたい。それらの語は、同義類義の関係で一つにまとめられているものである。同義とか類義とかいうことの意味については、ここで詳細に論ずることはできないが、いわゆる待遇（敬意の方向と量）や、美醜、新古、詩性などの語感をぬきにして、同じ文脈の同じ地位（また転換された文脈の相当する地位）に現われることが許される限りのものである。その限度には広狭さまざまのとり方がある、類義の範囲は広がり得るのである。しかし、ここでは、あらゆる文脈について検証した結果を示すのではないことを、ことわっておかなければならぬ。

もう一つのことわりは、一つの項目に収めたのは同義類義の語の群であって、自由連想による語群ではないことである。従来の分類体辞書の中には、生活場面を分類してそれぞれの場面に現われ得る語をあげる、会話書の色彩の強いものがある。実用的には最も自然な体裁で、生活場面と語との関係を見るのに有効で便利なものではあるが、ここではむしろ、一つの意味が生活場面に応じてどのような語として現われるかに关心があつて、自由連想をことさら極力避けようとした。項目間の排列はいわば連想的なものであり、項目内の語の排列も、生活場面による自由連想を全く排除し得たとは言い切れないが、趣旨として上の通りである。たとえば《ビール》については、飲酒行動に関連して、《酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔・ビヤホール》等々が連想されるであろう。しかし、この一群の語は、《飲む》や《コ

まえがき

ップ》にとつては必ずしも同等の重要さを持つとは言えない。それにはその連想語群がある。連想語群をとらえることも語彙論上の大切な仕事であると思われるが、ここでは、《ビール》をただ《酒・ウイスキー・スタウト》とグループをなすものとして扱い、《飲む》や《ビヤホール》との関係を断つたのである。

この分類語彙表に収めた語は、およそ三万二千六百語である。これらの語は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊（1962）の語彙表に掲げる高使用率の語のうち、人名、会社名、球団名等の個別の名、および記号の類を除く約七千語を中心とし、それにつづく使用率をもつ約五千語を補い、さらに阪本一郎氏の『教育基本語彙』に選ばれた二万二千五百語のうち、上と重複しないものを加え、また、それらの語を各項目に分類したものと通覧した上で主観的に増補したものを含むものである。日常生活でより基本的な役割をはたしている語は、大体において取りあげてあるかと思うが、主観的増補に際して、この表を見ればすぐにその項目に属すべきものとして思い浮べることができると思われる語、所属項目の明白な語は、よほど重要と認めない限り、割愛したものがある。たとえば《ひちりき》をあげないが、それが《楽器》の類 (1.456) であることは明らかであろう。

また、いくつかの語が組になっている場合に、一つか二つだけをあげて他を加えなかつたものがある。たとえば《真北、真西》はあげたが、《真南、真東》をしいて加えなかつた。また、比較的専門特殊に属すると認める語も多くを捨てた。すでに中心の七千語の中に、たとえば裁縫用語（この表の1.384や1.42など）や、野球や将棋の略語（この表の1.337や1.457など）もあるのであるが、これらとの比較の上で、基本的な語の採択を決定させるのが、この表の役割そのものと考えるわけである。

各項目に必要な語句を補充すること、それらの語句の必要さを他の語句と比べること、それが問題である。ある項目では、新たに加えられようとする語が、大部分かたかなかつてあるような場合もあるであろう。単に同一の物ごとの命名の新旧として、新語または古語がつけ加わる場合、また同類ではあるが全く新しい物ごとの命名がつけ加わる場合もあるであろう。これらの増補とその評価は、すべて本書の利用者にまかされている。

われわれの語彙調査の結果から取り入れた語は、われわれのいわゆるβ単位であつて、比較的短い語形である。これに対して阪本語彙から取り入れた語や、主観的な増補による語は、必ずしもβ単位ではなく、β複合も含まれている。われわれのβ単位では、《自転》と《車(シャ)》とはそれぞれ1単位であるが、そのほかに《自転車》という複合語は報告21の使用率を示す語彙表にはのせてない。今この分類語彙表では、《自転》と《車(シャ)》を収めることはもちろんあるが、《自転車》もまた阪本語彙から補ってのせた。また比較的少数ではあるが、《しりもちをつく》というような慣用語句も補うこととした。これはβ単位の語の意味を考えるためにも、厳密にβ単位で一貫するよりも、普通の表現単位をある程度採用しておくほうが、実用的な目的にかなうと考えたからである。

ただ、中心の七千語については、後述のように、星印を頭につけて示すことにした。すなわち、単独の《自転》や《車》は星印で示される。それに対して、《自転車》は、実際《自転》と《車》との組合せとして、32回現れていたのであるが、星印では示されない。この点は多少問題になるであろうが、今はそのままにしておくことにする。

1.3 初版『分類語彙表』

まえがき

この本の体裁

この本の分類語彙表は、分類項目一覧と本表と五十音順索引との3部から成る。分類項目一覧は、本表の各項目につけた見出しのことばを、本表の項目番号順に掲げたものである。その見出しは、必ずしも項目に収める語のすべてをおおうようなことばであるとは限らないが、大体において、その項目の性質を示し得るであろう。いわば分類の総目録である。

本表は、分類の1項目ごとに、同義類義の関係の認められる語の群を収めて、一つの順に排列したものである。項目には一つ一つ分類番号をつけ、また見出しを設けた。

分類番号は、五十音順索引および本表での相互参照に用いられる。たとえば(1.201)や(1.1257)のように、整数位1けたと、小数点以下3けたまたは4けたで表わす。(4けた目は、小字を用いた)整数位の1~4は、品詞論的区別の4類(4ページ参照)、小数点以下第1位の1~5は、意味範囲の5部門(5ページ参照)、第2位以下はその細分である。小数点以下は品詞論的な4類の間で、相互参照に便利なように内容上関係のある項目に、なるべく同じ番号を(少なくとも小数点以下第2位まで)与えるようにした。そのため、(2.)の類、(3.)の類では、隣りあった項目で番号の飛んでいる部分がある。(なお、報告21の語彙表にも、この分類番号が示してあるが、多少変更したものがあるので、本書の索引を利用されたい。)

見出しへは、努めてその項目の全体を示すような語を選んだが、いくつかの語を併記した場合も多く、また説明的な語句を用いた場合もある。

項目の大きさ、すなわち収容語数は、必ずしも平均していない。しいて独立の項目に立てなくてもよさそうなものも、認められないわけではないが、分類表作成の過程での混乱を避けるため、修正を最小限度に止めた。

一つの項目の内部でも、さらにいくつかのグループが認められるものは、グループごとに行を変え、さらに番号をつけたものもある。そのグループの大きさ、またグループ分けのレベルについても、項目の場合と同様に、過不及がある。

星印の語は、報告21の語彙表に掲げるものの、すなわち、現代雑誌九十種の語彙調査において、使用率が0.014パーセント以上(標本使用度数が7以上)であった語である。ただし、この語彙調査はβ単位を数えたものであり、したがって星印の語は、もとよりβ単位である。しかし、この分類語彙表には、β単位以外の語(語彙調査で2単位以上に分割した語)をも収めているので、この表の中で、星印の語とその他の語とを、使用率の上から比較することはできない。

なお、2項目以上に星印で重出するものがあるが、それぞれの項の意味で基準以上の使用率があったものとは限らない。報告21の語彙表では、一般に多義の用法を合わせた使用率が示してあり、今はそれを意味ごとに分割せず、重出する限り星印で示した。<もの>は報告21では<者>と<物>とを合併しているが、この分類語彙表では、<者>と<物>とを別にして、ともに星印にしてある。(いくらか星印の脱漏もあろうかと思われる。再治の機を待つ。)

語の表記は、便宜に従った。もとより表記の標準を示すのがこの本の目的ではないので、当用漢字表にはかかわらず漢字を用いたものがある。また、同じ語を前後異なった表記

まえがき

で両出したものがあり、送りがなもまま不統一の点がある。

漢字については、括弧の中に読み方を注した場合もある。同じ漢字を音訓両様によませた場合もある。

動詞、形容詞の示し方については、報告21の語彙表の見出し語形の示し方の考えに準じた。すなわち、

動詞は連用形を代表の形とし、五段活用は<思いう>のように、代表形のあとに連体形の語尾を小文字で添え、一段活用は<起きル>のように、代表形のあとにかたかなルを小文字で添え、カ変・サ変は、<来ル><関しスル>のように、代表形のあとに連体形を小文字で添えた。

形容詞は語幹を代表形とし、<赤い>のように連体形語尾<い>を小文字で添えた。<暖か>のように、形容詞活用と形容動詞活用を持つものについては、<暖かい、な>のように、両方の連体形語尾<い、な>を小文字で添えた。そのほか、副詞的語句について、語尾の<て><と><に>等を小文字にしたものがある。

語のあとに、他の分類番号を注記したものがある。これは、多義の語で他の項目にもはいっているもの、また、本来他の項目に入れるのが適当と思われるもの、などについて、相互参照の便宜のためにつけたものである。同一類の中の他の項目を指示するのには、類の番号、すなわち整数位の数字を省略した。たとえば、(1.160)の<心境>に(.3004)とあるのは、同じ(1.)の類の中の(1.3004)を参照せよということである。

五十音順索引は、本表に収めた三万余の語句を五十音順に排列し、各語についてその語が本表に現われる項目の分類番号を示したものである。語の表記は、外来語および動植物名をかたかなとし、その他、漢字を用いるには、必ずしも当用漢字表の制限によらなかつた。なお、動詞・形容詞は、本表の示し方にかかわらず、普通の辞書のように終止形で掲げた。形容動詞は語幹だけを示すのを原則とした。

初版『分類語彙表』が語彙調査の結果を記述していることは、動詞・形容詞の示しかたで端的に知られる。その示しかたは、一般には親しまれていない。——予稿で言い落としました。

初版『分類語彙表』の特徴
語彙調査の結果を示す表から
同義語類義語集への脱皮を始めた。

まえがき

1. 本書について

本書は、昭和39年に国立国語研究所資料集第6として公刊した『分類語彙表』¹⁾の増補改訂版である。『分類語彙表』という名称については、「元版のまえがき」(p.9)を参照せられたい。

2. 収録した語句について

本書に収めた語句は、文法上の自立する「単語」を中心とするが、それと同様の意味上の働きを持つ連語・接辞・慣用句等を排除しない。すべてを「語」と呼んでおくことにする。

語の採用範囲であるが、現代の日常生活で普通に用いられる語を中心に、各種語彙調査の結果その他から選定した。異なり語数は約8万語である（異なり語数とは、同一の語が何度も出現しても1回と数えた場合の語数のこと）。一つの語が複数の分類項目に分類されることがあるので、収録した総語数としては約9万6千語となる。なお、耳慣れない専門用語や古語・方言、また社会生活上使用を遠慮すべき語の類は除いている。元版にあった語もその例外ではない。固有名詞については、原則として一般的な地名及び人名や組織名を例として収録するにとどめたが、普通名詞的に用いられる商品名については一部収録した。

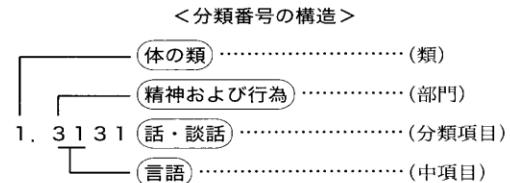
本書に収録した語の数は以下のとおりである。

類	延べ	異なり
体	64,457	56,130
用	21,605	16,704
相	8,879	7,357
その他	870	789
全体	95,811	79,516 (注)

(注) 異なりは、それぞれの類の中で数えたものなので、異なりの欄を合計しても全体の数値とは一致しない。

3. 分類について

本書の分類方式は、分類番号を用いてそれぞれの分類項目の体系的位置付けを示したところに特徴がある。分類の各項目には、例えば「1.2340」のように類を整数位に置いて小数点以下4けたの「分類番号」が付されている。この数字全体あるいはその一部分が、全体の中に占める個々の分類項目の位置付けを示している。分類番号によって表される意味的範疇は、より広い概念から順に、「類」「部門」「中項目」「分類項目」となっている。以下にそれぞれの範疇を簡単に説明する。



(類)

最初に語を大きく四類に分ける。すなわち、1. 体の類、2. 用の類、3. 相の類、4. その他の類である。体の類は、名称を表す語で、名詞の類。用の類は、存在・活動を叙述する語で動詞の類。相の類は、状態を叙述する語で、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の類。その他の類は、一部の副詞、接続詞、感動詞である。

分類番号の整数位が上記の「類」の区分に対応する。なお、慣用句・連語については、個々の慣用句・連語の文法的な機能を考慮して、それぞれ適切な「類」に配置した。

(部門)

体・用・相の各類の中に、大きな意味的まとまりとして、「抽象的関係」「人間活動の主体」「人間活動—精神および行為」「生産物および用具」「自然物および自然現象」という五つの部門を設けた。ただし、用・相の類は、「人間活動の主体」「生産物および用具」の部門を欠く。部門は、小数点以下一けた目の数字で表される。

(分類項目)

体・用・相それぞれの類の中に、ほぼ同様の分類項目を設け、同様の配列をとった。三類相互の参照の必要から、原則として三類共通の項目名と項目番号を付けたので、類によつては番号が飛んでいる場合がある。分類番号はなるべく元版の番号を引き継ぐようにしたため、必ずしも連続していない。

(中項目)

今回の増補にあたって、試みとして中項目を設けた。これは、小数点以下一けた目と二けた目を合わせた部分に相当する。中項目は部門をより具体的に細分したもので、その下位に位置する分類項目をまとめるものである（なお、中項目の一覧を「分類項目一覧」扉裏に掲げたので、参照されたい）。

なお、以上の意味的範疇に付いた見出しが、それらの内容がなるべくよく代表されるように選んだが、意味上の大体の目安にとどまるものである。

(段落)

また、増補により収録語数が多くなったため、分類項目の中に意味上の語集団を設けた。これを「段落」と名付けて番号を付けたが、これはもっぱら検索の便のためである。段落および段落内の語の順序は、なるべく意味・用法の広いほうから狭いほうへ配列しているが、必ずしも厳密ではない。なお、分類項目内での意味のまとまりの区切りを示すために

1.4 『分類語彙表 増補改訂版』

まえがき

行間に*を表示したところがある。

4. 増補改訂の内容について

本書の初版は1964年(昭和39年)である。それ以来、各方面で使われてきたが、なにしろ「ワープロ」も「パソコン」もなかった40年も前のものであるので、増補改訂の必要があるのは当然である。今回、<体系の大きな変更は行わない>という方針のもとに増補改訂版を作ることにした。

4.1 増補の内容

元版の収録語数は約3万2千語であったが、今回の増補改訂版では約9万6千語に達した。これは一般の小型国語辞典に匹敵する量である。

複合語や新語を付け加えたことについては、特別の説明は不要ない。たとえば、シャツの類(1.423 下着・羽織・ズボン・コートなど)には、元版では、

ワイシャツ 開襟シャツ ブラウス アロハ

があがっていたが、今回(1.4220 上着・コート)は、このほかに、

カッターシャツ ポロシャツ スポーツシャツ だぼシャツ アロハシャツ Tシャツ
タンクトップ

を増補した。形容詞・副詞の類でも、元版の<3.1661 新しい・古い>には、

古めかしい 古くさい 陳腐 常套 お定まり

をあげていたが、増補改訂版では<3.1660 新旧・遅速>に、これらのほかに、

アウトオブデータ じじむさい 年寄り臭い 古色蒼然 時代がかつた 古ぼけた
古びた かびの生えた [～考え] くたびれた [～服] 使い古した 旧態依然

因循 ありきたり 今に始めぬ

などがふえている。(ただし、「常套」「お定まり」の2語は、増補改訂版では体の類へ移っている。)

増補のうち、注意しておきたいのは、1) サ変動詞 2) 慣用句 3) 多義語 の3点である。

1) サ変動詞のうち、1字漢語に「する」がついた「愛する」「信する」の類は、元版にもはいっていた。しかし、2字以上の漢語をもとにした「愛好する」「信用する」「合理化する」などは、採用していないかった。これは、基準にした国語研究所の現代雑誌九十種の調査の単位が、参考にした阪本一郎『教育基本語彙』や一般的な国語辞典とおなじく「愛好」「する」などに切れていたためである。たしかに、意味の説明を目的とする辞典ならば、「愛好」という項目があれば、これと別に「愛好する」という項目をたてる必要はないだろう。しかし、類義の表現をさがす、という分類語彙表の目的からすれば、

愛する 好む たしなむ 好く めでる 好き好む <2.3020 好悪・愛憎>

があれば、

愛好する 愛慕する 愛着する

も同じところにあった方がよく、

ほれる こがれる 恋いこがれる

があるなら、

恋する 恋愛する 懸想する 恋慕する

まえがき

などもほしいところである。今回はこれらを増補した。

2) 辞典の見出し語と違う単位を増補した、という点では、慣用句もサ変動詞と同じである。<2.3020 好悪・愛憎>から例をひくと、元版の「愛する」に加えてサ変動詞の「愛好する」とともに、類義の「に入る」を増補した。以下、「←」の左側が元版にある単語、右にあるのが今回増補した同義・類義の慣用句である。

きらう いとう うとんじる ← 虫が嫌う むしづが走る 嘔吐を催す
いやがる ← 嫌気が差す 鼻に付く
親しむ ← 気が合う 馬が合う 気を許す 情が移る
あまえる あまつたれる ← 鼻を鳴らす 言葉に甘える
憎む ← きばをむく 修羅を燃やす
こがれる ← 胸を焦がす 思いをはせる
なつかしむ なつかしがる ← 後ろ髪を引かれる
ねたむ そねむ やく ← 焼きもちをやく 角を生やす 角を出す

3) 基本語の多くは多義的である。その意味のそれぞれには、当然別の分類番号が与えられなければならない。元版においても「あがる」は、移動の意味では<2.1540 上がり下がり>に、終わる意味では<2.1502 開始・終了>に、食べる意味では<2.333 生活・衣食住>に分類されている。しかし、全体としては元版における多義語の処理は、不十分だった。今回の増補改訂版ではこの点を改良して、同じ単語を意味に応じて何箇所にも出すようにした。身体の部分名称の例をあげよう。「+」の左側は元版にあるもの、右が今回付け足した意味での分類番号と項目名である(元版と増補改訂版とで同じ項目の分類番号が異なる場合、増補改訂版の方で示した)。

頭 <1.5601 頭・目鼻・顔> + <1.3421 才能>
顔 <1.5601 頭・目鼻・顔> + <1.3030 表情・態度>, <1.3041 自信・誇り・恥・反省>, <1.3142 評判>
目 <1.5601 頭・目鼻・顔>, <1.1840 模様・目>, <1.1962 助数接辞>
+ <1.3061 思考・意見・疑い>, <1.3063 比較・参考・区別・選択>, <1.3066 判断・推測・評価>, <1.3091 見る>
鼻 <1.5601 頭・目鼻・顔> + <1.5607 体液・分泌物> [はな (漬)]
のど <1.5601 頭・目鼻・顔> + <1.3031 声>
背 <1.5602 胸・腹・背> + <1.1740 左右・前後・たてよこ>, <1.1911 長短・高低・深浅・厚薄・遠近>
胸 <1.5602 胸・腹・背> + <1.3000 心>
胴 <1.5602 胸・腹・背> + <1.4252 武具・防具・刑具>
腹 <1.5602 胸・腹・背> + <1.3000 心>, <1.3045 意志>
ウエスト <1.5602 胸・腹・背> + <1.1911 長短・高低・深浅・厚薄・遠近>
しり <1.5602 胸・腹・背> + <1.1742 中・隅・端>
しっぽ <1.5602 胸・腹・背> + <1.1651 終始>, <1.1742 中・隅・端>

4.2 分類項目の修正

『分類語彙表』の組織は、大枠ではつぎのようになっている。なお、4.として「その他」

1.4 『分類語彙表 増補改訂版』

まえがき

の類がある。

1. 体の類（名詞）	2. 用の類（動詞）	3. 相の類（形容詞・副詞等）
1.1 抽象的関係	2.1 抽象的関係	3.1 抽象的関係
1.2 人間活動の主体	—	—
1.3 人間活動—精神および行為	2.3 精神および行為	3.3 精神および行為
1.4 生産物および用具	—	—
1.5 自然物および自然現象	2.5 自然現象	3.5 自然現象

今回の改訂にあたって、この大枠はそのまま受け継ぐことにした。ただし、これ以下の小項目については、若干変更した場合がある。これは、おもに名詞の分類と動詞の分類とが対応するようにしたためである。たとえば、元版では、

1.1500 作用	2.1500 変化
01 変化	01 改新・変換
02 同化・強化など	02 開始・終了
03 変換	03 連続
04 改新	
05 開始・終了	
06 中止	
07 連続	

と、対応していなかったものが、増補改訂版では、

1.1500 作用・変化	2.1500 作用・変化
01 変換・交換	01 変換・交換
02 開始	02 開始
03 終了・中止・停止	03 終了・中止・停止
04 連続・反復	04 連続・反復

と、完全に対応するようになっている。ただし、名詞の分類と動詞の分類とが、いつもこのように対応しているわけではない。また名詞と形容詞・形容動詞とのあいだでは、対応をとるのがきわめて難しく、あきらめざるをえなかつた。

分類それ自体の変更ではないが、使いやすさのために、次の2つの修正をほどこした。

第1は、「中項目」の設置である。元版では、<1.1 抽象的関係>という部門の下位分類が<1.1500 作用>という分類項目だったのだが、今回、中項目を立てて、たとえば分類項目の<1.1500 作用・変化>から<1.1584 限定・優劣>までを<1.15 作用>という形でくくった。このようにして、<1.1 抽象的関係>の内部を以下の10の中項目に分けた。（ ）のなかの数字は、そこに属する分類項目の数である。

1.10 事柄	(4)
11 類	(9)
12 存在	(7)
13 様相	(13)
14 力	(4)
15 作用	(39)
16 時間	(26)
17 空間	(13)

まえがき

18 形	(6)
19 量	(20)

第2は、段落番号の設置である。元版でも、同じ分類項目に属する単語はいくつかのグループ（段落）に細分され、それぞれ先頭が1字下げになっていたのだが、特にそれぞれに番号が付けられてはいなかつた。しかし、1994年に国立国語研究所言語処理データ集5として『フロッピー版分類語彙表』²⁾を出すにあたり、語の検索を容易にするために、これらの段落に番号を付けることにした。今回は、語数がふえたこともある、段落番号の必要性は一層ましたと言える。しかし、これはあくまで検索の便宜のためであつて、分類自体の小分けを意味するものではない。

4.3 体裁の変更

元版では、動詞は連用形を代表の形として見出しを立てていたが、増補改訂版では終止形に変更した。また、元版では、各項目の分類番号が小数点以下3けたのものと4けたのものとがあったが、増補改訂版ではすべて4けたに統一した。

4.4 改訂の経過

国立国語研究所の所員を中心とする何人かの研究者の手によって、原編者の林大・元研所長を含めて改訂の作業が始まったのは1981年である。宮島達夫・野村雅昭・中野洋などを代表者とする文部省科学研究費による研究という形をとったこともある。この作業は、中心となつた中野の死去（1999年）によって一時停滞を余儀なくされたが、関係各位の努力によって、今回刊行の運びになった。

改訂作業にあたつたのは、国立国語研究所員では

（故）中野洋・相澤正夫・山崎誠・笛原宏之・柏野和佳子・小沼悦

元所員では

林大・宮島達夫・野村雅昭・齋岡昭夫・石井久雄・石井正彦・加藤安彦・大島資生である。なお、所外の

加賀美徹也・高木一彦・（故）藤田正春

ほかの各氏からも、有益な助言をいただいた。記して感謝の意を表する。

4.5 付録CD-ROMについて

CD-ROMには次の5つのファイルが収められている。

分類項目一覧 (koumoku.pdf)

分類語彙表 (bunrui.pdf)

索引 (sakuin.pdf)

逆引き索引 (rsakuin.pdf)

解説 (readme.txt)

詳細は上記解説のファイルを御覧ください。

1) 『分類語彙表』は絶版になつてゐる。

2) 『フロッピー版分類語彙表』は絶版になつてゐる。

2. 1 『古典対照語い表』

まえがき

(1969・12版)

- ➡ ○ この語い表は、古典における用語の類似度を調査するための基礎資料としてつくったものである。
- ➡ ○ 表は各ページとも3つのらんにわかれていて。左のらんにあげたのは、2つ以上の作品に共通してあらわれた単語、中央と右の2らんにあげたのは、1つの作品だけにあらわれた単語である。
- ➡ ○ 度数は、調査単位のとり方など、かぞえ方によってかわる。たとえば、源氏物語のことなり語数および「心」「たまふ」の度数は、索引のままのと、ここでとった基準によって修正したばあいで、つぎのように大きくかわってくる。

ことなり語数	「心」	「たまふ」
修正前	14206	1489
修正後	11423	3411

これは、「心」については「心なし」などの「心」をあわせたため、「たまふ」については補助動詞としての用法をすべてたためである。したがって、この表にあげる数字は、すべて、以下にのべるような基準でかぞえるところなる、ということであり、もし他の作品と比較しようとするなら、その作品の用語もここにあげた基準によってかぞえなければ不正確である。

まえがき

- ➡ 本書は、古典のなかでどの単語が何回ずつ使われているかを、表にしてしましたものである。とりあげた作品は、
- ➡ 万葉集・竹取物語・伊勢物語・古今和歌集・土左日記・後撰和歌集
・かげろふ日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡
・方丈記・徒然草

の14である。

戦後、古典の総索引がたくさんつくられたようになったことは、たいへんよろこばしい。しかし、これらの索引のあいだにはどのようなことばを1単語とみとめるかという点で、かなり大きなくいちがいがみられる（宮島「総索引への注文」『国語学』76）。ここでは、それらの点について、できるだけ一定の方針で統一するようにつとめた。それで、結果的には、ある索引にのっている項目でこの語い表にはのせてない、というばあいもある。たとえば、「心なし」という単語がこの語い表にないのは、これを「心」と「なし」とにわけてかぞえたためである。逆に、索引にはない見出し語をたてたばあいもある。こうして単位を修正したため、源氏物語を例にとると、つぎのように大きく数がかわっている。

ことなり語数	「心」	「たまふ」
修正前	14,206	1,489
修正後	11,423	3,411

- ➡ これは、「心」については「心なし」などの「心」をあわせたため、「たまふ」については補助動詞としての用法をすべてたためである。したがって、この表を〈索引の索引〉として利用するにしても、ほかの作品の用語と比較するにしても、「凡例」にのべた単位認定その他の方針に注意していただきたい。

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

凡例

- 本書は、宮島達夫編『古典対照語彙表』(1971年 笠間書院刊)の改訂増補版にあたる。古典での単語が何回使われているかを、作品間で対照できる表にまとめている。
- 旧版は徒然草・方丈記・大鏡・更級日記・紫式部日記・源氏物語・枕草子・蜻蛉日記・後撰和歌集・土左日記・古今和歌集・伊勢物語・竹取物語・万葉集の14作品を対象としていたが、今回、平家物語・宇治拾遺物語・新古今和歌集の3作品を追加して17作品とし、平安作品と徒然草とのあいだの空白を多少うめることができた。
- 今回は、また、すべての単語に国立国語研究所編『分類語彙表』(増補改訂版 2004年 大日本図書)の分類番号を記した。これについては各索引を参照し、あらためて語意を確認した。

凡 例

〈1〉 資料

作品本文およびその用語の意味解釈は、おおむね、次の索引が採用したものと尊重し、あとの
〈2〉本文などに述べる方針によって調整した。

古典索引刊行会『万葉集索引』(2003年 塙書房刊)

山田忠雄『竹取物語總索引』(1958年 武藏野書院刊)

伴 久美「伊勢物語に就きての研究 索引篇」

(大津有一編『伊勢物語に就きての研究』所収、1961年 有精堂出版刊)

西下經一・滝沢貞夫『古今集總索引』(1958年 明治書院刊)

日本大学文理学部国文学研究室『土左日記總索引』(1967年 櫻楓社刊)

大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集總索引』(1965年 大阪女子大学刊)

佐伯梅友・伊牟田経久『かげろふ日記總索引』(1963年 風間書房刊)

柳原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美『枕草子總索引』(1967年 右文書院刊)

池田亀麿『源氏物語大成 索引篇』(1953年 中央公論社刊)

東京教育大学中古文学研究部会『紫式部日記用語索引』(1956年 日本学術振興会刊)

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記總索引』(1956年 武藏野書院刊)

秋葉安太郎「校本大鏡總索引」(『大鏡の研究 上巻 本文篇』所収、1960年 櫻楓社刊)

滝沢貞夫『新古今集總索引』(1970年 明治書院刊)

青木伶子『方丈記總索引』(1965年 武藏野書院刊)

増田繁夫・長野照子『宇治拾遺物語總索引』(1975年 清文堂出版刊)

近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子『平家物語語彙用例總索引』(1996年 勉誠社刊)

時枝誠記『徒然草總索引』(1955年 至文堂刊)

このうち万葉集だけは旧版では正宗教夫『万葉集總索引』によったが、新版では古典索引刊行会の索引に切りかえた。今回、別に万葉集の巻別対照表を編集・刊行するが、そのためには前回の統計は役に立たず、最初から白紙の状態で調査しなければならない。正宗本索引は初版が1929年で80年以上前のものであり、その後の万葉学の進歩を反映していないので、そのまま使うのは適当ではないと判断したのである。

- [2] 後半「Excelによる『日本古典対照分類語彙表』データの活用」は、〈8〉に述べるように本書の内容をエクセル・ファイルで提供するので、エクセルでデータをあつかう初步を記している。
小木曾智信氏(国立国語研究所准教授)に執筆していただいた。

〈8〉 CD の内容

- [1] 印刷されたすべてを、コンピュータ・ファイルでも提供する。
- [11] 表は MS エクセル・ファイルである。xlsx と xls とがあるが、同じ内容である。
なお、正しくは、このファイルを印刷したのが本書である。漢字の字形は、コンピュータのシステムやソフトウェアあるいはプリンタなどによって小異が出る。本書の字形は一例である。
- [12] 凡例および別冊は、PDF ファイルである。
- [2] 「展開」というフォルダを設けて、簡単な集計などをしたファイルを提供する。
出現頻度配列語彙表・意味分類配列語彙表も、そこで得られる。
詳細は、そのフォルダにあるファイル「OO_解説.pdf」を参照されたい。『分類語彙表』の意味分類項目の一覧も載せている。
石井久雄が作成を担当した。

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

見出し あり す	順 漢字 4 有	語種 動ラ変	品詞 「あらま」	注記 17	作品 合計	意味分類																					
						徒然	平家	宇治	方丈	新古	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉	意味分類				
こと	6 為	動サ変	「せんか」	17	9778	360	1857	1117	47	202	455	128	146	3060	654	497	173	65	139	133	96	649	21211(発生・復活)/21220(成立)/ 23066(判断・推測・評価)/ 23430(行為・活動)/23822(建設・土木)				
ひと	2 事		「ことの」	17	9749	538	1141	849	45	57	766	98	134	4804	449	399	98	40	54	58	108	111	11000(事柄)/13800(事業・業務)				
なし	3 無	形副	「心なし」	17	8869	572	575	691	46	249	326	134	189	3732	669	438	211	80	235	173	94	455	12000(人間)/12020(自他)				
いと	2 違	形副	「心なし」	17	7381	305	817	557	44	220	221	104	103	3346	284	332	212	31	153	75	61	516	31200(存在)				
いふ	1 言	動四	「いはく」	17	6323	69	11	102	2	5	362	95	148	4237	715	436	9	19	4	70	31	8	31920(程度)				
おもふ	思	動四		17	6267	354	728	1409	17	48	223	120	69	1228	735	466	89	124	62	134	147	314	23031(声)/23100(言語活動)/23102(名)/ 23350(冠婚)				
もの	物・者		「ものか」	17	5612	263	624	768	25	128	195	52	80	1942	535	225	174	41	124	57	76	303	11000(事柄)/12000(人間)/ 12030(神仏・精霊)/14000(物品)				
こころ	心		「心憂し」	17	5598	168	345	170	29	158	129	49	87	3411	156	171	168	26	117	57	32	325	11302(趣・調子)/11742(中・隅・端)/ 13000(心)/13047(信仰・宗教)/ 13070(意味・問題・趣旨など)/13420(人柄)				
みる	2 見	動上一		17	5299	111	421	548	11	218	163	97	59	1839	227	246	214	39	158	74	69	805	23065(研究・試験・調査・検査など)/ 23066(判断・推測・評価)/23091(見る)/ 23311(処世・出處進退)/23350(冠婚)/ 23520(応接・送迎)/23650(救護・救援)				
このほど	此程	連体		17	4547	108	594	901	13	27	506	67	28	1624	108	111	19	61	13	65	74	228	31010(こそあど・他)				
				17	3706	80	382	445	12	44	200	56	64	1762	253	330	32	4	6	16	18	2	11302(趣・調子)/11611(時機・時刻)/ 11780(ふち・そば・まわり・沿い)/ 11911(長短・高低・深浅・厚薄・遠近)/ 11920(程度・限度)/13410(身上)				
なる	1 成・為	動四		17	3014	77	540	296	13	66	233	49	25	919	151	250	85	17	71	54	32	136	21220(成立)/21500(作用・変化)/ 23430(行為・活動)/25701(生)				
よ	1 世		「よに」	17	2802	96	267	91	21	172	179	37	34	1570	55	62	61	1	50	22	15	69	11611(時機・時刻)/11621(永久・一生)/ 11623(時代)/ 12600(社会・世界)/13310(人生・禍福)				
そのきみ	3 其	連体		17	2700	132	775	522	27	17	219	52	34	568	110	59	1	12	2	47	23	100	31010(こそあど・他)				
	1 君			16	2572	9	194	32	78	135	4	61	963	79	35	123	4	82	28	8	737	12000(人間)/12010(われ・なれ・かれ)/ 12320(君主)					
さり	3 然有	動ラ変	「さらず」	16	2378	57	440	217	4	14	217	21	38	1080	166	76	1	3	2	27	15	21200(存在)/31010(こそあど・他)/ 31332(良不良・適不適)/ 41120(展開)/41130(反対)					
きこゆ	聞	動下二		17	2373	21	268	17	3	9	96	16	16	1659	103	103	18	3	7	9	1	24	23093(聞く・味わう)/ 23100(言語活動)/23102(名)				
いまみゆ	1 今見	動下二		17	2284	29	340	286	11	66	155	28	12	836	78	100	57	16	49	25	13	183	11641(現在)				
まうす	申	動四	「まをす」	15	2277	104	1073	296	1		405	9	2	187	84	11		2	2	13	67	21	23100(言語活動)/23102(名)/ 23430(行為・活動)				
わがおぼす	我思	連体		17	2148	35	192	157	7	113	40	18	19	475	37	72	145	9	140	28	12	649	31040(本体・代理)				
	恩	動四		11	2068	3	31	26		92	3	11	1843	19	21				1	18	23020(好惡・愛憎)/23030(表情・態度)/ 23061(思考・意見・疑い)						
しる	2 知・領	動四		17	2066	127	182	180	21	115	58	25	16	591	133	78	112	16	86	31	21	274	23050(学習・習慣・記憶)/ 23062(注意・認知・了解)/ 23500(交わり)/23600(支配・政治)/ 23650(救護・救援)/23701(所有)				
またこれ	2 又此	副		17	2065	80	251	189	21	43	230	25	30	698	217	155	9	23	8	15	7	64	31010(こそあど・他)/31612(毎日・毎度)/ 41110(累加)/41140(選択)				
やう	様	漢		13	1978	44	74	466	2		106	57	40	900	107	118		18		7	39	11100(類・例)/11300(様相・情勢)/ 11800(型・型・姿・構え)/13081(方法)					
いかかく	3 如何斯	形動副	「いかに・かくば」	17	1955	41	373	257	4	72	90	22	22	698	120	133	26	3	14	5	7	68	31010(こそあど・他)				
				17	1944	37	76	198	9	13	111	9	16	1066	35	119	20	18	18	20	28	151	31010(こそあど・他)				

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

見出し	順漢字	語種	品詞	注記	作品	合計	源氏										意味分類							
							徒然	平家	宇治	方丈	新古	大鏡	更級	紫	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉		
あまりこと	余事				1	1									1								11000(事柄)	
いちじ	一事	漢			3	14	6	7															11000(事柄)	
いちだいじ	一大事	漢			1	1	1																11000(事柄)	
いなびどころ	否所				1	1																	11000(事柄)	
いはひごと	祝事				1	2																	11000(事柄)	
うみ	有為	漢			1	1			1														11000(事柄)	
えうじ	要事	漢			2	2	1	1															11000(事柄)	
かうなこと	件				1	1									1								11000(事柄)	
くだん	事柄				3	38		26	11								1						11000(事柄)	
ことがら	異事	漢			2	4	1	3															11000(事柄)	
ことごと	雜事				7	44			7														11000(事柄)	
さふじ	子細	漢			3	5	1	1															11000(事柄)	
しきい	勝事	漢			3	40		35	4														11000(事柄)	
しようし	勝事	漢			1	3		3															11000(事柄)	
しよじ	諸事	漢			2	2	1	1															11000(事柄)	
しれごと	痴事	漢			1	1		1															11000(事柄)	
すずろごと	漫事				1	3											3						11000(事柄)	
すぢすぢ	筋筋				1	1											1						11000(事柄)	
せうじ	小事	漢			1	1		1															11000(事柄)	
そぞろごと	懶別				1	1		1															11000(事柄)	
だいせうじ	漫事	大小事			2	5	4																11000(事柄)	
たじ	他事	漢			2	11		6	5														11000(事柄)	
ただごと	只事				4	11		6	3	1													11000(事柄)	
でう	条	漢			1	14		14															11000(事柄)	
とをこと	十事				1	1		1															11000(事柄)	
なににごと	何事				15	503	24	62	49		4	24	3	2	269	29	23	1	2		3	7	1	11000(事柄)
なにわざ	何業				7	22		8	1														11000(事柄)	
なほあらじごと	猶事				1	1		1															11000(事柄)	
にはかごと	俄事				1	1																		11000(事柄)
はかなごと	果無事				1	1																		11000(事柄)
はかなしごと	果無事	萬事			1	7		5	1														11000(事柄)	
ばんじ	萬事	漢			2	6	5	1															11000(事柄)	
ひとごと	一事				5	13	1	6															11000(事柄)	
ひとごと	人事				2	2	1																11000(事柄)	
ひとつごと	一事				1	1																		11000(事柄)
ふるごと	古事				2	13																		11000(事柄)
まさなごと	正無事				1	1	1																	11000(事柄)
まめごと	忠実事				2	5																		11000(事柄)
みごと	見事				1	1	1																	11000(事柄)
やくないじごと	益無事	混			1	1																		11000(事柄)
やすだいじ	易大事	混			1	1		1																11000(事柄)
ようなしごと	用無事	混			1	1																		11000(事柄)
りやうでう	由無事				4	7	3	1															11000(事柄)	
ろくちん	兩條	漢			1	1	1																11000(事柄)	
すぢ	六塵				1	1																		11000(事柄)
よし	筋				10	253		1	1		2	4		3	225	8	6	2		1				11000(事柄)/11101(等級・系列)/11310(風・親・姿)/11711(線)/13071(論理・証明・偽り・誤り・訂正など)/11302(趣・調子)/11310(風・親・姿)/13081(方法)
ふしふしころ	節節				4	11	1				1	1			8								11000(事柄)/11690(場合)/11700(空間・場所)/11742(中・隅・端)/11771(奥・底・陰)	
くま	所				17	1714	83	331	183	14	2	49	52	20	598	148	135	3	44	4	30	17	6	11000(事柄)/11700(空間・場所)/12010(われ・なれ・かれ)
ここ	此処				17	615	11	91	76	2	3	9	6	4	251	22	71	2	7	5	5	6	44	11000(事柄)/11700(空間・場所)/12010(われ・なれ・かれ)
そこ	其処				12	198		32	39		4	8	16	1	24	18	15		3	9		29	11000(事柄)/11700(空間・場所)/12010(われ・なれ・かれ)	
かたざま	方様				6	46		3	6		5		1	30		1							11000(事柄)/11730(方向・方角)	

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

古典分類語彙表・現代語彙追記 1.1.2

古典分類語彙表・現代語彙追記 1.1.2

1(体の類)	22282
1.1(抽象的関係)	3869
1.10(事柄)	126
1.100(事柄)	82
あまりこと<余事>	
いちじく<一事>	後 6 平 7 大 1 桁 1
いちだいじく<一大事>	後 1
いなびごころ<否否>	
いはひごと<復事>	
うひごと<初事>*	平 1
うみく<有為>	後 1 平 1
えうじく<要事>	
かうなこと	
かたさま<方様>*	平 3 宇 6 大 5 桁 1 桁 30 桁 1
きどく<者物>*	後 1 平 4 宇 1
くだん<作>	平 26 宇 11 桁 1
くま(猶) *	後 3 平 5 新 4 更 3 宇 5 桁 3 2 後 2 古 1 万 6
ここ<此處>*	後 11 平 91 宇 76 方 2 新 3 大 9 更 6 宇 4 251 桁 22 緒 71 後 2 土 7 古 5 伊 5 竹 6 万 44
こと<事>*	538 1141 849 方 45 新 57 766 更 98 134 4804 449 399 後 98 土 40 古 54 伊 58 108 111
ことがら<事柄>	後 1 平 3
ことごと<異事>	宇 7 大 4 更 2 宇 1 桁 24 桁 5 桁 1
ざふじ<趣事>	後 1 平 1
しさい<子細>	平 35 宇 4
しようし<趣事>	平 3
じょじ<諸事>	後 1 平 1
しれごと<既事>	平 1
すぢごと<既事>	
すぢすぢ<筋筋>	平 1 宇 1 新 2 大 4 宇 3 225 桁 8 桁 6 後 2 古 1
せうじ<小事>	平 1
そうべつ<差別>	平 1
そく<其始>*	平 32 宇 39 新 4 大 8 更 16 宇 1 桁 24 桁 18 緒 15 古 3 伊 9 万 29
そそろごと<漫事>	後 12 平 43 宇 15 大 6 桁 11 桁 2
だいじ<大事>*	平 4
だいせうじ<大小事>	平 6 宇 5
たじ<他事>	平 6 宇 3 方 1
ただごと<只事>	平 14
でう<条>*	後 83 331 183 方 14 新 2 大 49 更 52 宇 20 598 148 135 後 3 土 44 古 4 伊 30 竹 17 万 1
ところ<所>*	宇 1
とをこと<十事>	
なにごと<何事>	
なにわざ<何事>	
なほらしごと<渠事>	
なほざりごと<等閑事>*	
にはかごと<渠事>	
はかなごと<渠無事>	
はかなしごと<渠無事>	
ばんじ<万事>	
ひとこと<一事>	後 5 平 1
ひとごと<人事>	後 1 宇 6 大 1 桁 4 桁 1
ひとつこと<一事>	後 1
ひとつし<一節>*	後 1 新 1 宇 2 桁 14 桁 1 後 1
ふしふしひ<筋筋>*	後 1 大 1 更 1 桁 8 桁 12
ふるごと<古事>	後 1
まきなごと<正無事>	
まめごと<忘失事>	
みごと<見事>	
もの物・著>*	
やくなしごと<益無事>	
やすだいじ<易大事>	
ようなしごと<用無事>	
よし<由>*	後 19 202 宇 89 方 1 新 2 大 20 更 9 宇 6 160 桁 10 緒 7 後 11 土 1 古 10 伊 6 竹 8 万 62
よしなしごと<由無事>	後 3 宇 1 大 2 更 1
りやううどう<異条>	平 1
ろくちん<六盡>	後 1
わざ<業>*	後 23 平 2 宇 21 方 5 大 17 更 1 宇 15 324 桁 24 緒 23 後 1 土 2 古 1 伊 7 竹 3 万 7

【[分類語彙表】】	アイテム アクシデント あれこれ あれやこれや 案件 遺事 一事 一大事 一件 一式(いっしき) 営業 仕事
大事(おごと) お笑い 快事 かど(康) 開心事 楽 奇跡 奇蹟 吉事 旧事 因事 因変 くだり(件) ケース 件 現象	2
一こ【檢～】 项 後件 後事 交通事故 项目 事(こと) 事柄 檢事 現事・事变 事項 事柄 茶飯事 痞事 檢事	
事(じ) 事件 事故 事項 次項 時事 事物物 事象 事情 自然現象 事態 事変 条 朱項 小变 小变 技業本部	
航行(しょぎょう) 航事 航式 航路 航段 所与 人身事故 心靈現象 スキヤングル 青天の霹靂 前件 前項 その後 その辺	
そんなこんな 対岸の火事 大事(だいじ) 対象 大変 他事 ただ事 住日の的 超常現象 現事 現象 付かぬ事 出來事	
テストケース 何やかや 犯件 犯物 刃傷ざた の 犯事 パニック ハブニング 損損経歎 万端 万端 凡例 ひと事 費日	
百事 百般 風物 不件事 物(ぶつ) 物件 物象 武勇伝 分(ぶん) 嘘(うそ) 物物 別便 別便 別事 へったくれ 別問題	
変[本筋寺の～] 変事 本件 ミクフル 言(むね) 者(もの) 物(もの) 物事 やつ 余慶 与件 由(よし) 余事 よそ事 余の儀	
例 実い事	
1.1010(こそあど・他)	25
あ<彼>	後 1 平 54 宇 16 大 2 更 5 桁 4 桁 8 緒 2
いづれく(何)	後 14 平 43 宇 4 方 1 新 24 大 20 更 1 宇 2 桁 80 桁 6 緒 6 後 21 土 3 古 6 伊 4 竹 3 万 5
か<彼>*	後 8 平 1 宇 15 方 1 大 18 宇 2 桁 95 桁 5 緒 6
かたがた<方方>*	平 7 宇 4 方 1 新 2 大 9 更 1 宇 2 137 桁 4 古 1 竹 1
かれく(彼)*	後 5 平 24 宇 19 方 2 大 2 宇 3 桁 89 桁 19 緒 10 伊 2 竹 1 万 3
かれこれ<彼是>*	後 2 平 3
こ<此>	後 3 平 34 宇 62 新 1 大 4 更 1 宇 1 桁 28 桁 10 緒 4 古 1 竹 1 万 14
ご(真)	平 2
これ<此>*	後 73 783 351 方 21 新 11 大 98 更 24 宇 13 368 128 緒 88 後 7 土 21 古 6 伊 20 竹 35 万 13
これこれ<是是>	後 1
し<其>*	
そ<其>*	後 1 平 5 宇 2 新 2 大 2 更 1 桁 9 桁 8 緒 1 土 1 古 1 竹 1 万 8
それ<其>*	後 12 173 203 方 2 新 15 109 更 8 宇 18 205 桁 93 緒 45 後 5 土 3 古 5 伊 15 竹 17 万 10
それそれ<其其>*	宇 1 大 2 桁 1 緒 1
な<何>*	後 27 153 115 方 4 新 34 大 34 更 26 宇 12 379 104 緒 54 土 5 古 33 伊 10 竹 17 万 91
なに	万 1
なにか<何故>	
なにが<何故>	後 8 平 2 宇 6 大 14 桁 51 桁 11 緒 1
なにがし<某>*	宇 1 宇 1 桁 24 桁 4 緒 6
なにくられ<何故>	後 2 平 25 宇 6 大 3 桁 2
なにもの<何物・何者>*	後 5 平 8 方 1 桁 16
なにやかや<何故>	後 5 平 8 方 1 桁 1
なんぞ<何>*	後 1 平 15 宇 10 大 4 更 1 桁 1
べち<別>*	
【[分類語彙表】】	
あ あちら あれ あれしき あれら いずれか エトセトラ か こ 後者 こちら これ これこれ これしき これら 運転(しゅはん) 自余 前者 そ そちら その他 その他のいろいろ その他 それ それしき それら 他者 他方 どちら どちらか どちら どれ どれか どれどれ 何(なに)か 何(なに)か 何(なに)か 何(なに)か 何(なに)か 何(なに)か 何(なに)か 何事か 何(なにに) 何者 何者か 何ら 何らか 別口 別個 別様 方(ほう)	

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

9 意味分野の統計

意味分野ごとの異なり語数を、多い順に上位 20 位（21 分野）まで示す。

意味分野	語数（異なり）
12390: 固有名	2350
12590: 固有地名	1791
14410: 家屋・建物	354
12411: 管理的・書記的職業	350
12030: 神仏・精霊	350
23100: 言語活動	324
12410: 専門的・技術的職業	292
21527: 往復	288
31346: 貿易・安危	284
15401: 木本	282
12630: 社寺・学校	268
13360: 行事・式典・宗教的行事	256
23020: 好惡・愛憎	253
25701: 生	249
21560: 接近・接触・隔壁	248
15402: 草本	244
23392: 手足の動作	230
23030: 表情・態度	227
12340: 人物	207
15240: 山野	206
15410: 枝・葉・花・見	206

10 分類語彙表の問題点

分類語彙表にしめされているのは、意味の区分ではなくて、意味的範疇・意味分野の区分である。

意味の区分ならば

12050 老少【少年、老人……】

31915 寒暖【冷たい、暖かい……】

のように反対語がおなじ項目にはいるはずがない。意味分野がおなじならば反対語は当然おなじ場所にある。

ただし、分類語彙表には意味の上位・下位ではなく全体・部分の関係にあるものがある。「14660 乗り物（海上）」に、「ボート、漁船、軍艦」などとならんで「船首、甲板」がある。

また、「出入り」と「出・出し」「入り・入れ」を区別するなら「往復」も「往」と「復」とを追加し、「上下」「男女」「賞罰」「捕縛・釈放」なども下位語をつけたすべきかもしれない。しかし、これは理論的にすぎて実際的ではないだろう。

「不愉快」が「13011 快・喜び」にはいっているのにはとまどう。見出しへ「快・不快」にすべきか。

11 今回の意味分類の方針

新項目は立てない、項目名は変えない。

意味の上位・下位ではなく全体・部分の関係にあるものも、現代語の分類語彙表にしたがった（「ふなばた」は分類語彙表では「11742 中・隅・端」と「14660 乗り物（海上）」の両方にあげてあるが後者に入れた）。

枕詞は「39999」、枕詞以外で意味不明の語は「99999」にした。

以下、まざらわしいもの、修正したものの例：

「秦・大唐」は「国」に、「北国」は「政治的区画」に、「武藏・越後」は「固有地名」に。
「羽根」は「手足・指」か「皮・毛髪・羽毛」か。（双方に）
「岸」は「海・島」「川・湖」「山野（断崖）」の3項目に。
「網」は「14200 衣料・綿・革・糸」ともみえるが「14201 布・布地・織物」に。
「撰政・閔白」は君主だが「12411 管理的・書記的職業」に。
「女御・更衣」は女官だが「12110 夫婦」に。
「武芸（平家）」は「スポーツ」では不適。「13081 方法」にいた。
地名と人名はどちらともきめかねる例もあったが、区別するようにつとめた。

12 現代語との差

「かぶと、よろい」はもちろん「わだつみ」も分類語彙表（現代）にある。したがって、日本古典対照分類語彙表を中古・中世の用語の代表とするのは、これらの作品の文体的かたよりを別にすれば、いちおう安全だが、現代語の代表を分類語彙表とするのは、収録語彙年代の範囲がひろいので、かえって注意を要する。しかし、さあたってこれらを古典語・現代語とよんでくらべてみよう。

現代語では「12340 人物」が「12030 神仏・精霊」よりずっと多いが古典語では逆転（207:350）。現代語では「12410 専門的・技術的職業」には「医師・芸術家・力士」などがはいるが古典ではほとんど「僧・和尚・法師」など仏教関係の専門家である。

古典語の「13160 文献・図書」はお経がおおい。

古代語の「14630 機械・装置」にあるのは「いくちはた（幾千機）、いほはた（五百機）、はた（機）、はたもの（機物）、ふみぎ（踏木）、みづぐるま（水車）」の6語である。

つまり古典語は宗教色がこく技術面がうすい。

乗り物は分類語彙表で陸上／海上／空中・宇宙と3つに分かれている。「14670 乗り物（空中・宇宙）」という項目には古典の例がないだろうと思っていたが、万葉集の「いはふね（岩船）」と新古今の「あまのいはふね（天乃磐船）」があった。神様が空中を飛行するのに使う岩の船である。ちなみに、「14650 乗り物（陸上）」57語、「14660 乗り物（海上）」93語と、車よりも船の方がよくあらわれる。

13 意味の認定

分類語彙表にしたがわずに別の項目にいた例もある。「たたり」は「13003 飢渴・酔い・疲労・睡眠など」と「13681 礼」とにあるが、どちらもおちつかず、動詞「たたる」が「23310 人生・禍福」とあるので「13310 人生・禍福」に入れた。分類語彙表では「入水」を「15702 死」にしているが、宇治拾遺の例は「水にはいること」であるので、「11532 入り・入れ」にした。

例外として新設した「39999 枕詞」は「あしひきの、そらみつ」など意味不明のものにかぎり、一般の品詞として解釈できるものは「くさまくら、14270 寝具」のように枕詞にはいれていない。枕詞以外でまったく意味不明の語句には99999という番号をつけた。「かはは、つのかめ……（ともに枕草子）」などである。

意味の解釈は基本的に『日本国語大辞典』（第二版）により、『岩波古語辞典』を参照した箇所もある。万葉の項目は例外的に日国でも意味未詳のまま取りあげることがある。「うちくちぶり」（語義未詳）、「まつしだす」（語義および語構成未詳）などがその例である。辞典で語義未詳ですますのは、めずらしいのではないだろうか。これらは、何らかの番号がついていればいいだろうと思い、日国に紹介

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

されている語説のなかから適宜選択して意味番号をつけた。万葉は中西進『全訳注 万葉集』によって意味をきめた。源氏は新日本古典文学大系の注にたよったが作業の途中で『源氏物語大辞典』が出版されて助かった。「ちごちごし」は『源氏物語大成』に「こちごちしノ誤カ」とあるのにしたがった。

ここでは、いちいちどの作品がどのような意味分野の用例をもっているか、は考慮しない。ここであげている意味分野は、いわば 17 作品全体を 1 つの作品とみなして、そのどこかで使われている用例の意味分野をしるしたものである。

問題なのは日国が網羅的に作品をあげてはいない、ということである。たとえば、a) の意味では宇津保の、b) の意味では源氏の、c) の意味では今昔の例文があがっていたとする。このばあい、b) の意味では今回の調査対象に用例があったといえるが、a)・c) の意味になかったとは、厳密にはいえない。a) には源氏、c) には平家の用例もあったのだが、宇津保・今昔にくらべて新しいので省略しただけかもしれない。しかし、そのことをたしかめるには、全作品の全用例について検討しなければならない。それは、とうてい不可能である。それで、このようなばあい、a)・c) の意味は、今回対象にした 17 作品では、実際になかったものと仮定した。日国に 17 作品の用例がなくても、1 つの意味しか立てていないばあいは、その意味番号を採用した。しかし、今回対象にした 17 作品のどれかで使われていて、かつ日国に複数の意味が記述してあるのに、17 作品のどれも用例に採用されていないばあいは、作品の総索引にもどって、17 作品にその意味があるかをたしかめた。

14 意味ごとの比較

意味分野を参照することで、ここでとりあげた作品全体を対象とする調査はできる。乗り物について上にとりあげた。古くどのような病気があったかは、「15721 病気・体調」でわかる。ここにあるのはあくびやう（悪病）・あたゆまひ（？）・あつしき（篤）・いたはり（勞）・いたみ（痛）・え（疫）・えきれい（疫癆）・えやみ（疫病）・かさ（瘡）・かぜ（風邪）・きやうびやう（狂病）・げんじようらう（現所勞）・ここち（心地）・ごなう（御惱）・こひ（頭足）・ごふびやう（累病）・しつえき（疾疫）・しはぶきやまひ（咳病）・しはぶきやみ（咳病）・しひ（癥）・じやけ（邪氣）・しゆくびやう（宿病）・しゆびやう（衆病）・しょらう（所勞）・せつじゆ（絶入）・だいえきれい（大疫癆）・ちゅうびやう（重病）・つつが（恙）・つつみ（恙）・なつやせ（夏痘）・なやみ（懨）・ふじき（不食）・ふびやう（風病）・ふよ（不予）・へいあ（病瘡）・みだりあし（乱脚）・みだりかくびやう（亂脚病）・みだりかぜ（亂風邪）・もがさ（飽瘡）・ものやみ（物病）・やつれ（瘞）・やまひ（病）・やまひごと（病事）・ようそ（癰疽）・よごこち（世心地）・らうげ（劳氣）・りびやう（痢病）・わらはやみ（瘧病）・あれい（違例）

である。しかし、これは多分野語の意味ごとの度数をしめていないという意味では不完全である。「かさ」には「瘡」のほかに「笠」があり、「かぜ」には「風邪」のほかに気体の動きをしめす「風」がふくまれる。

「あかさ」には「明るさ」の意味と「赤さ」の意味とがある。これは

「あかさ」明・赤,15010 (光) / 15020 (色)

であるが、その内訳（竹取の例は光、枕の例は色）はしめていない。

あかさ 語ごと：明・赤,15010 (光) / 15020 (色)

意味ごと：明,15010 (光)

赤,15020 (色)

のようにしめせば、ほかの作品との意味的な比較ができる。しかし、意味ごとの度数は「かぜ」「あかさ」のように意味の境目がわかりやすいものなら数えられるが、「あはれ、哀」のように 1606 例が「13020 (好惡・愛憎) / 31302 (題・調子) / 33002 (感動・興奮) / 33014 (苦惱・悲哀) / 33020 (好惡・愛憎) / 43000 (感動)」の各意味に分散しているものでは、「31302 (題・調子)」と「33014 (苦惱・悲哀)」などとの境目がファジーであり、かさなっているとも考えられ、原理的に線引きがむずかしい。意味をいくつかに分けてしまふ辞典は、それぞれの意味に典型的な例だけをあげればすむが、計量はそうはいかないのである。

15 作品間の比較

／体 11：抽象的関係／

「11624 季節」万葉 :0.57%，古今 :1.95%，後撰 :1.95%，新古今 2.18% など歌集でたかく、土左 :0.23%，枕 :0.49%，源氏 :0.40%，紫 :0.33% など散文ではひくい。

「11642 過去」では、伊勢 3.16% が断然たかい。「むかし (149)」・「もと (45)」などの使用度数がたかいためである。ひくいのは、徒然 0.39%，後撰 0.44%，万葉 0.41% などである。

「11960 数記号 (一二三)」でたかいのは、徒然 0.80%，方丈記 0.55%，大鏡 0.49% など事実をのべた作品で、万葉 0.13%，後撰 0.11%，新古今 0.12% などはひくい。

／体 12：人間活動の主体／

「12040 男女」では、「をとこ (200)」・「をんな (135)」におしあげられて、伊勢 5.01% がたかい。

この「をとこ」「をんな」は「12110 夫婦」の意味ももち、伊勢の「12110 夫婦」の比率 5.27% のたかさの基礎になっているが、「12110 夫婦」では、「いも (509)」・「せこ (120)」・「つま (104)」・「わぎもこ (124)」などをもつ万葉 2.04% もたかい。

固有名詞の比較では

	12390: 固有名	12590: 固有地名
万葉	0.23%	4.36%
古今	0.02%	2.99%
竹取	3.20%	0.55%
大鏡	3.86%	1.03%

などが対照的である。

／体 13：人間活動—精神および行為／

「13210 文芸」では、「うた (57)」のために、土左 2.23% がたかい。

／体 14：生産物および用具／

意外なことに「14660 乗り物 (海上)」は平家 45 語・万葉 36 語・宇治 15 語などに対して土左は 2 語、つまり「ふね」「とも」しかない。ただし「ふね」の使用度数は平家 (184)・万葉 (138)・宇治 (68) について土左 (56) が 4 番目に多い。

「14400 住居」「14410 家屋・建物」などで大鏡がたかいのは、「みや (228)」・「との (174)」などのせいであるが、じつは、これらは廃物をさす例と人をさす例とをふくんでいるので、厳密には文脈ごとの検討を要する。

／体 15：自然物および自然現象／

自然現象について、その意味分野でだけつかわれる語をみてみる。万葉は「15155 波・潮」38 語・